

れる。尾張型山茶碗第7型式に相当する山茶碗で、遺構の帰属時期は13世紀中葉と考えられる。

SP0949(第7図) 屋敷地Bの南端、SK154の南西で検出した柱穴である。掘形の平面形は円形を呈し、規模は長径0.5m、短径0.4m、深さは約0.4mを測る。断面形は碗状を呈する。

埋土は褐色粘質土で、掘形上位から古瀬戸中期の灰釉花瓶が出土した(写真図版24-6)。出土遺物から遺構の帰属時期は14世紀前半と考えられる。

第9節 その他の遺構

SX002(第7図) 屋敷地Aの西側で検出した平面形が不整形な遺構である。埋土は基盤層に酷似した黄橙色粘質土で、整地土層になる可能性が高い。埋土に細片化した山茶碗を含むことから、帰属時期は中世と考えられる。

SX012(第7図) 並行する二本の区画溝SD025・079に挟まれた空閑地で、屋敷地A・B間を南北に走る道路状遺構と考えられる。幅5～7mを測る。南側は切通しSX013に破壊されているが、本来はさらに南側に延びていた可能性が高い。溝SD071の北側はさらに幅広い区画の空閑地となっているが、道路状遺構になるか不明である。

SX013(第7図) 調査区南端で検出した切通し(古道)である。調査地東側の旧街道(東浦街道)から尾根を分断する形で東西方向に延びたのち、調査区西端でやや北西に向きを変えつつ、調査区外に連続する。検出長は約62m、底面の幅は約2～4m、遺構検出面からの深さは最大で2.5mを測る。

調査区東端・西端で行った断面観察では、表土下約30cmで地山が露出し、間層が一切見られなかったことや江戸時代後期の溝SD002に後出することなどから、幕末頃に開削された切通しと判断した。

ただし、古道などの道路遺構は、堀などが埋没した後に古道として利用される例もあり、また、補修・改修を繰り返すことで、前段階の遺構が破壊されることも多い。切通しは南側丘陵斜面の傾斜変換点に位置しており、屋敷地A・Bの南端を区画するには相応しい場所に位置しており、堀SD120と主軸方位もほぼ一致するため、切通し開削前に区画溝や堀があった可能性も十分考えられる。

第4章 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物収納コンテナにして約30箱分ある。これには、土器・陶磁器類、土製品、瓦類、石器・石製品、金属製品・鍛冶関連遺物、木製品、貝類などの動物遺体がある。

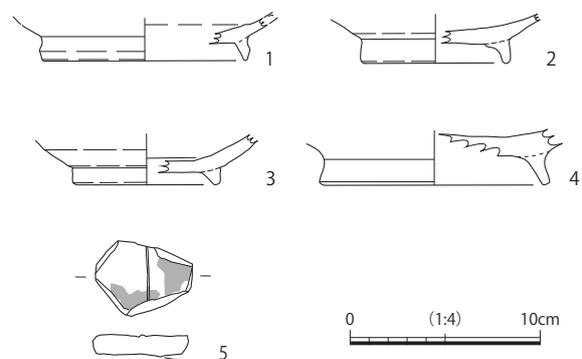
時期としては縄文時代から近世に至るまで、実に幅広い時代の遺物があるが、その大半が中世の遺物である。

以下、今回出土した遺物を、古代の土器・陶磁器、中世の土器・陶磁器、近世の土器・陶磁器、製塩土器、土製品・瓦、石器・石製品、金属製品・鍛冶関連遺物、木製品、自然遺物に分けて報告する。なお、出土遺物の型式や年代観は、凡例にある基本参考文献を基準とした。

第1節 古代の土器・陶磁器

古代の土器・陶磁器には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。出土量は遺物収納コンテナで約1/5箱と少なく、図化できた遺物も少ない。須恵器は甕の胴部片が出土したが、細片のため図化していない。7世紀から8世紀代の製品と思われる。古代の遺物として他に製塩土器があるが、これについては後述する。

土師器(第35図) 古代の土師器には、脚付皿(24)と清郷型鍋(25)がある。24は脚部に回転ナデを施す脚付皿で、10世紀から11世紀代の製品と思われる。SK154から出土した。25は清郷型鍋で10～11世紀代の製品である。SK092から出土した。



第34図 出土遺物実測図①

灰釉陶器（第34図） 灰釉陶器は全部で10点出土した。いずれも細片化したものが多く、図化できたのは3点のみである。

1は猿投窯産の灰釉陶器の椀で、高台端を面取りする。O-53号窯式期に相当し、10世紀前葉に位置付けられる。SD025から出土した。2・3は猿投窯産の灰釉陶器の椀で、3の高台は断面三角形を呈する。いずれも百代寺窯式期に相当し、11世紀中頃に位置付けられる。SK092から出土した。

緑釉陶器（第34図） 緑釉陶器（5）は1点出土した。内外面とも緑釉を施釉する。ロクロ目が確認できるため何らかの容器になると考えられるが、厚みが1cmあるため小型品とは考えにくい。また、内外面とも施釉がみられるため壺とも異なる。内面端が緩やかにカーブを描く一方、外面が平坦であることから容器の蓋と考えておきたい。外面のロクロ目に平行して幅1mm程の細い突帯が巡る。古代の製品であろう。溝SD121から出土した。

第2節 中世の土器・陶磁器

中世の土器・陶磁器には、土師器、山茶碗、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、中国産磁器、墨書土器、瓦質土器があり、出土遺物全体の約6割を占める。そのほとんどが山茶碗、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器である。

以下、種別ごとに報告する。

土師器（第35図） 土師器には、皿（6～22）、羽釜（26～36）、鍋（37～43）がある。以下、器種ごとに報告する。

土師器皿は、成形・調整技法によって、底部に回転糸切痕が残るロクロ成形皿（6・10・11・14～16・18～20）と回転糸切痕を残さない非ロクロ成形皿（7～9・12・13・17・21・22）の大きく2つに大別できる。またこれらは、胎土の色調によって、A類：白色系（11）、B類：灰黄色系（6・15・17）、C類：肌色系（7～9・12）、D類：橙色系（10・13・14・16・18・19）、E類：黒色系（20～22）の大きく5つに分類できる。

出土点数が少なく、詳細な分類は行わなかったが、概ねC類の肌色系は非ロクロ成形皿、D類の橙色系はロクロ成形皿に分類でき、胎土の色調に

よる分類と成形技法による分類の間に対応関係が認められる。なお、この胎土の色調による分類を基準に、胎土剥片分析を実施した（第5章）。

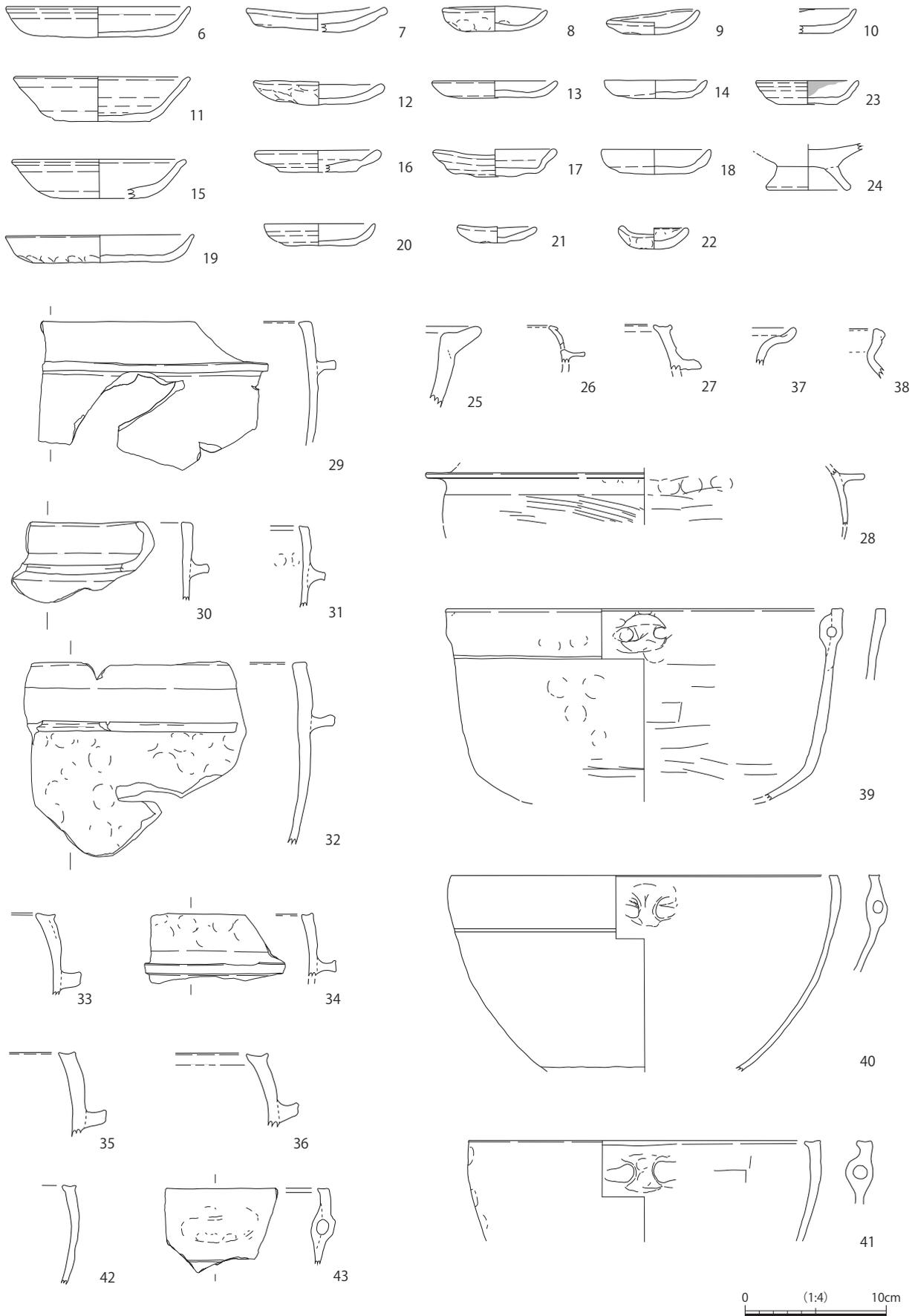
非ロクロ成形皿のうち、7は底部と体部の境が不明瞭な手づくね成形皿で、14世紀～15世紀代の製品である。SK070から出土した。8は手づくね成形皿で、体部外面に指押さえが顕著に認められる。15世紀代の製品と考えられ、SK121から出土した。9は手づくね成形皿で、SK071から出土した。15世紀代の製品と思われる。12は手づくね成形皿で、体部外面に指押さえが顕著にみられる。15世紀代の製品であろう。SK090から出土した。13は手づくね成形皿で15世紀代の製品である。屋敷地Bの柱穴SP0702から出土した。17は手づくね成形皿で全体に歪みが激しい。時期は14世紀代であろう。屋敷地Bの柱穴SP0957から出土した。

21・22は手づくね成形による口径5cm前後の小型の皿で、内外面ともに指押さえが顕著に認められる。底部と体部の境界が不明瞭で歪みが著しい。16世紀後葉の製品と考えられる。いずれもSD120から出土した。

ロクロ成形皿のうち、6は底部が大きく、口径約13cm、器高約2cmの中型サイズの皿である。12～13世紀代の製品と考えられ、SD120から出土した。10は口縁端に煤が付着しており、灯明皿に使用されたと考えられる。15世紀末から16世紀代の製品と思われる。SB02の構成柱穴SP0108から出土した。11は底部径12cm程を測る中型品で、15世紀後半から16世紀代の製品である。胎土が白色を呈する点は、西三河の土師器の胎土に酷似しており、搬入品の可能性が高い。SK069から出土した。

14はSK095から出土したロクロ成形皿で、16世紀中頃の製品である。15は11と同じく中型サイズの皿で、16世紀中頃の製品である。胎土が黄白色を呈する点は、尾張地域の土師器の胎土に酷似しており、搬入品の可能性が高い。SK091から出土した。16は器壁が厚く底部が小さい皿で、16世紀中頃の製品である。屋敷地B南東端のSP0718から出土した。18は16世紀中頃の製品で、SK050から出土した。

19は底部が大きく、口径13cmの中型サイズの皿



第35图 出土遺物実測図②

で、16世紀後半の製品と考えられる。SD025から出土した。20はSK050から出土した皿で、16世紀後半の製品である。

26～36は羽釜である。26～28は伊勢型の内彎型羽釜で、26の口縁下部には焼成前の穿孔が認められる。26～28はいずれも15世紀代の製品と考えられる。26は検出時、27はSD120、28はSD022からそれぞれ出土した。

29～32は口縁部から体部にかけて直線的な羽釜で、29は15世紀後半から末、30は15世紀末、31は15世紀後半から16世紀初頭の製品である。32は16世紀前半の製品である。29・31はSD120、30はSK063、32はSK079から出土した。

33～36は口縁部から体部にかけて内彎する羽釜である。33～35は16世紀前半から中頃の製品で、いずれもSK092から出土した。36は16世紀後半の製品で、SD121から出土した。

37～43は鍋である。37は伊勢型鍋で、13世紀後半の製品である。38は受け口状口縁の内耳鍋で、東三河地方に多い「く」字形内耳鍋の模倣品あるいは搬入品と思われる。15世紀から16世紀代の製品である。いずれもSD079から出土した。

39～43は半球形内耳鍋である。39は体部が箱形の半球形内耳鍋で、15世紀後葉の製品と考えられる。SD017の上層から出土した。43は体部がやや開きつつ口縁部まで直線的にのびる内耳鍋で、39に続く15世紀末頃の製品である。40は体部が内彎する半球形内耳鍋で16世紀初頭、41は16世紀前半、42は16世紀中頃の製品と考えられる。40～43はいずれもSD120から出土した。

中世無釉陶器（第34-4図・36図） 中世無釉陶器には、山茶碗（44～57）、小皿（58～75）、片口鉢I類（76～78、第34図-4）、壺（79・80）、突帯文四耳壺（81）、山茶碗の融着資料（82～84）がある。

山茶碗・小碗・小皿は、調査区のほぼ全域にわたって出土しており、遺物収納コンテナで約10箱分が出土した。時期的には初期山茶碗第3型式から尾張型山茶碗第9型式までの製品があり、産地としては常滑窯産、猿投窯産の製品を中心に、瀬戸窯産、東濃窯産のものが少量含まれる。

44～57は山茶碗で、このうちの44～48・56・57は付高台、49～55は糸切り未調整の平底である。44は猿投窯産の初期山茶碗第3型式に相当する山茶碗で、底部外面に回転糸切痕が残る。SK092から出土した。45は常滑窯産の山茶碗で高台端に粉殻痕を残す。高台内面はナデ調整を施す。初期山茶碗第4型式～尾張型山茶碗第5型式古段階に相当する製品で、SD120から出土した。46・47はSK092から出土した常滑窯産の山茶碗で、底部外面に回転糸切痕、高台端に粉殻痕を残す。いずれも尾張型山茶碗第5型式に相当する製品である。

48は瀬戸窯産の完形の子茶碗である。底部に輪高台が付着しているが、焼成時のトチンを利用したものである。底部外面に回転糸切痕、高台端に粉殻痕を残す。尾張型山茶碗第7型式の製品で、屋敷地Bの柱穴SP0825から出土した。

49・50は瀬戸窯産の子茶碗で、いずれも底部外面に回転糸切痕が残る。50の内面にはやや光沢のある黒褐色の付着物があり、漆膜と思われる。いずれも尾張型山茶碗第8型式に相当する製品である。49はSK037から、50は屋敷地Aの溝SD024から出土した。

51～55は瀬戸窯産の子茶碗で、底部に回転糸切痕が残る。55は完形の子茶碗で、口縁端に煤が付着しており、灯明皿に使用されたと考えられる。いずれも尾張型山茶碗第9型式の製品である。51は掘立柱建物SB03の構成柱穴SP0008、52は屋敷地Bの柱穴SP0687、53はSK028、54はSK037、55はSE001からそれぞれ出土した。

56・57は東濃型の山茶碗である。56は高台端に粉殻痕が残る。尾張型山茶碗第7型式に併行する時期の製品と考えられる。屋敷地Bの柱穴SP0957から出土した。57は体部が扁平な山茶碗で、高台端に粉殻痕、底部外面に回転糸切痕が残る。東濃型山茶碗大洞東期（尾張型山茶碗第9型式併行）に相当する製品で、SE001から出土した。

58～75は小皿で、59・68を除いて糸切り未調整の平底である。58は猿投窯産の小皿で、口縁端に煤が付着することから、灯明皿に使用されたと考えられる。12世紀後半の製品で、SK114から出土した。59は内反りの底部をもつ常滑窯産の小皿で、

初期山茶碗第4型式新段階から尾張型山茶碗第5型式古段階の製品である。SD017から出土した。60は常滑窯産の小皿で、尾張型山茶碗第5型式の製品である。SD120から出土した。61～63は常滑窯産の小皿で、いずれも尾張型山茶碗第6型式に相当する製品である。61はSD120、62は屋敷地Bの柱穴SP0674、63は屋敷地Bの柱穴SP0673から出土した。62・63は完形品である。64はSD079から出土した常滑窯産の小皿で、尾張型山茶碗第6型式から第7型式にかけての製品である。

65～67は常滑窯産、68は瀬戸窯産、69は猿投窯産の小皿で、いずれも尾張型山茶碗第7型式に相当する時期の製品である。65と68は焼け歪みが著しい。69の底部外面には判読不能ながら墨書が認められる。65・66はSD126、67はSD079、68はSK092、69は遺物包含層から、それぞれ出土した。

70～72は瀬戸窯産の小皿で、いずれも尾張型山茶碗第8型式に相当する製品である。70はSK153南東の柱穴SP0957、71はSK154南東の柱穴SP0715、72はSD138北側の柱穴SP0824から出土した。73・74は瀬戸窯産の完形品の小皿で、いずれも尾張型山茶碗第8型式から第9型式に相当する製品である。73はSK162、74は屋敷地Bの柱穴SP0957から出土した。

75は東濃型の小皿である。底部外面に記号のような文字が墨書されており、花押と考えられる。東濃型山茶碗大畑大洞新段階（尾張型山茶碗第9型式併行期）の製品で、方形竪穴状土坑SK037から出土した。

76～78・第34図-4は片口鉢I類である。76は常滑窯産の片口鉢I類で、尾張型山茶碗第5型式に相当する製品である。SD017から出土した。77・78と第34図-4は、猿投窯産の片口鉢I類で、77は初期山茶碗第3型式に相当する製品である。体部外面は回転ヘラ削りのち、内外面ともに回転ナデを施す。78は初期山茶碗第4型式に相当する製品で、体部外面下半部に横方向のヘラ削り、内面は不定方向のナデを施す。第34図-4は脚部を残すのみであるが、12世紀前半の製品と考えられる。77はSK092、78はSE001、第34図-4はSD079

から出土した。

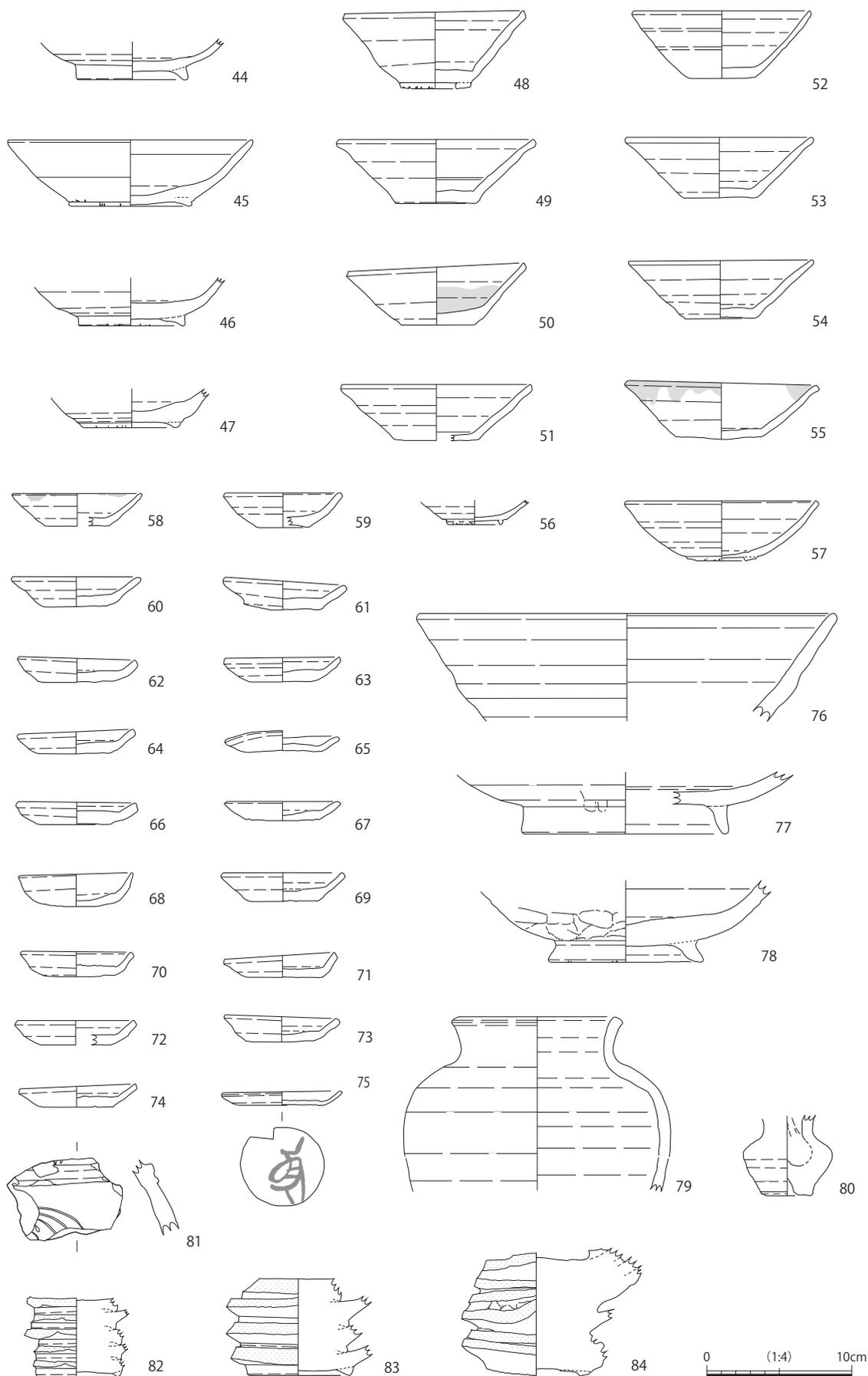
79・80は猿投窯産の小型壺である。79の口縁部は緩やかに外反し端部が肥厚する。内外面ともに回転ナデ調整を行う。12世紀後葉の製品で、SK092から出土した。80は器壁が厚手で、底面に小石が抜けたような窪みがみられるなど、雑な作りとなっている。底面はヘラ切り後未調整で、体部外面に回転ナデを施す。12世紀前半の製品で、掘立柱建物SB01の構成柱穴SP0294から出土した。

81は猿投窯産の突帯文四耳壺である。細片のため意匠は不明ながら、肩部にヘラ描きによる刻画文が認められる。刻画文壺の出土は全国的にも珍しく、注目すべき遺物と言える。12世紀初頭の製品で、SD079から出土した。

82～84は窯体内で融着した山茶碗である。いずれも常滑窯産の山茶碗・小碗で、底部付近を残して縁辺部は全て打ち欠かれている。SK092で17点出土したほか、SD017、SD025、SK037、SE001、SE002で各1点の計22点出土した。出土した22点のうち、尾張型山茶碗第4型式のものが4点、同第5型式のものが18点ある。SK092出土の1点のみ、内面が摩滅して平滑になっており、何らかの用途に転用されたと考えられる。墨痕は確認できない。以下、図化した3点を報告する。

82は小碗が5枚融着した資料で、尾張型山茶碗第4型式の製品である。83は山茶碗が4枚融着した資料で、尾張型山茶碗第5型式の製品である。いずれもSK092から出土した。84は山茶碗が6枚融着した資料で、尾張型山茶碗第5型式に相当する製品である。SE001から出土した。

現在確認されている石丸遺跡に最も近い山茶碗窯としては、遺跡の南西約550～600mに平子・平子B古窯、北側約550mに山之神社北古窯（第3図）があり、融着資料はこれら近隣の山茶碗窯から持ち込まれたと考えられる。なお、石丸遺跡と同様に知多半島の中世集落である東海市畑間遺跡⁽⁷⁾、武豊町ウスガイト遺跡⁽⁸⁾でも山茶碗の融着資料が出土しているが、いずれも用途は不明である。当遺跡でもその多くが用途不明だが、内面に使用痕が認められるものが1点だけ出土しており、使用方法を想定する上で興味深い。



第36图 出土遺物実測図③

瀬戸・美濃窯産陶器 (第37・38図) 中世瀬戸・美濃窯産陶器は、遺物収納コンテナで約6箱分が出土した。これには、天目茶碗(85～90)、平碗(91～94)、仏供(95・96)、縁釉小皿(97～101)、丸皿(102～104)、折縁中皿(105)、稜皿(106)、卸皿(107)、小鉢(108)、柄付片口(109)、合子蓋(110・111)、水注(112)、瓶子(113・114)、花瓶(115)、燭台(116・117)、卸目付大皿(118・119)、播鉢(120・121)、桶(122・123)があり、その他、細片のため図化できなかったが、折縁深皿、洗、盤類、直縁大皿、播鉢形小鉢、腰折皿、また四耳壺と思われる製品も出土した。

時期的には古瀬戸前期から大窯第4段階にかけての製品があり、古瀬戸後期の製品が大半を占める。以下、個別に報告する。

85～90は天目茶碗である。85は古瀬戸後Ⅲ期に相当する製品で、腰部以下は露胎になっている。屋敷地B北東部のSK106から出土した。86は古瀬戸後Ⅲ期に相当する天目茶碗で、腰部以下は露胎になっている。SK121から出土した。87は古瀬戸後Ⅲ期から同Ⅳ期に相当する製品で、腰部以下は露胎になっている。SK050から出土した。

88は高台内が内側に曲線的に削り込まれた内反り高台で、高台周辺に薄く錆釉を施す。古瀬戸後Ⅲ期に相当する製品で、SK037から出土した。89は古瀬戸後Ⅳ期新段階に相当する製品で、高台周辺に錆釉を施す。SD120から出土した。90は大窯第4段階に相当する製品で、体部内外面は発色の悪い鉄釉、腰部以下に錆釉を施す。SK064から出土した。なお、細片のため図化しなかったが、SK058から古瀬戸後期の灰釉天目茶碗が出土した。

91～94は灰釉平碗である。いずれも古瀬戸後Ⅳ期新段階の平碗で、91・92はいずれも腰部以下は露胎になっている。91はSK058、92はSK153から出土した。93・94は削り出し高台で、93の内面には重ね焼きに伴うトチン跡が残る。93はSK092、94はSD017から出土した。

95・96は仏供である。いずれも高台付近を残すのみだが、内外面は回転ナデ調整、底部は未調整で回転糸切痕が残る。95の体部外面には流下した鉄釉が認められる。高台付近は露胎となっている。

いずれも古瀬戸後Ⅳ期に相当する製品で、95はSK037、96はSK092から出土した。

97～101は縁釉小皿で、97・100・101は灰釉、98・99は鉄釉を施す。99以外は底部外面が未調整で回転糸切痕が残る。97は古瀬戸後Ⅲ期に相当する製品で、SD011から出土した。98は古瀬戸後Ⅳ期新段階に相当する製品で、SK052から出土した。99は体部内面と口縁部付近は鉄釉、以下に錆釉を施す。口縁端に煤が付着しており、灯明皿に使用されたと考えられる。底部外面に回転ヘラ削りを施す。遺物包含層から出土した。100は発色が悪く、釉ムラが著しい。古瀬戸後Ⅳ期新段階に相当する製品で、SK114から出土した。101は古瀬戸後Ⅳ期新段階に相当する製品で、底部外面に「上」字の墨書が認められる。井戸SE003から出土した。

102・104は鉄釉丸皿、103は灰釉丸皿である。102は古瀬戸後期後半の製品で、高台付近は露胎となっている。SD120から出土した。103は大窯第2段階の製品で、見込み部に菊花文を押印する。SK083から出土した。104も大窯第2段階に相当する製品で、SK063から出土した。

105は灰釉折縁中皿である。底部外面は未調整で回転糸切痕が残る。底部外面に花押の墨書が認められる。古瀬戸後Ⅲ期に相当する製品で、方形竪穴状土坑SK037から出土した。

106は稜皿である。削り出し高台で、全面に鉄釉を施す。大窯第2段階に相当する製品で、SK063から出土した。

107は灰釉卸皿である。底部は未調整で、回転糸切痕が残る。古瀬戸後期の製品で、屋敷地Bの柱穴SP0957から出土した。108は灰釉小鉢で、古瀬戸後Ⅲ期に相当する製品である。SK115から出土した。109は灰釉柄付片口で、古瀬戸中期の14世紀代の製品である。SK052から出土した。

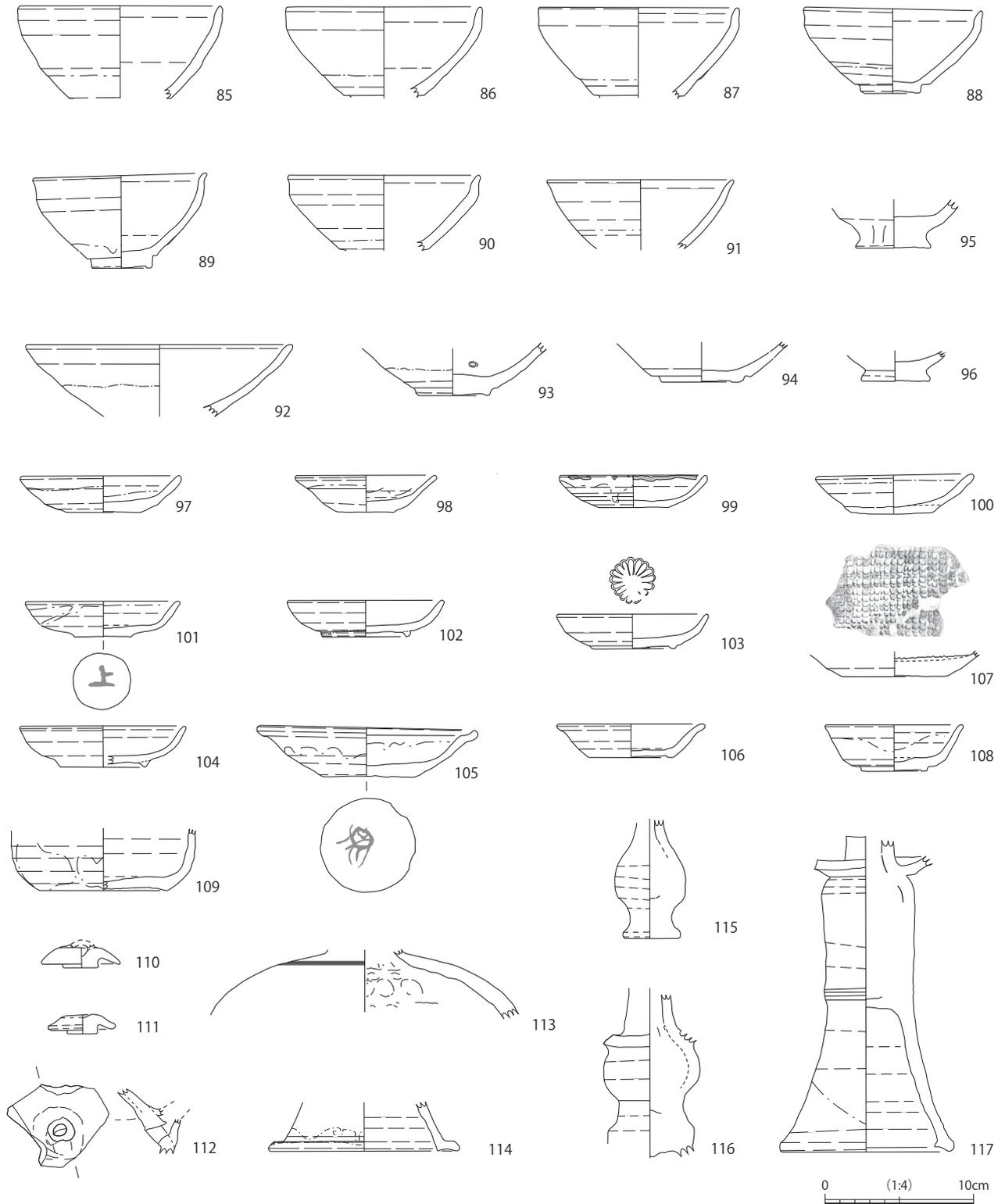
110・111は合子蓋である。110は紐の一部を欠くが、ほぼ完形品である。蓋の表側に鉄釉を施し、裏側は露胎である。古瀬戸後期の製品でSK034から出土した。111は灰釉の合子蓋で古瀬戸後期の製品である。110と同様に蓋の裏側は露胎である。SK037から出土した。合子の身は出土しなかった。

112は灰釉水注で、注口部を残すのみである。

古瀬戸中期の製品で14世紀代に位置付けられる。SK092から出土した。113・114は瓶子で、113は灰釉瓶子の肩部、114は鉄釉の根来形瓶子の脚部である。113は頸部付近に4本の浅い沈線が巡る。古瀬戸中期の製品で、14世紀代に位置付けら

れる。SK052から出土した。114は古瀬戸後IV期に相当する製品で、SD025から出土した。

115は灰釉花瓶で、口縁部を欠く。底部は未調整で回転糸切痕が残る。古瀬戸中II～III期に相当する製品と思われ、屋敷地B南端の柱穴SP0949



第37図 出土遺物実測図④

から出土した。

116・117は燭台である。116は鉄釉燭台で、上下2段の受皿のうち上段の受皿と脚部の大半を欠く。117と同様に大型品である。古瀬戸後IV期古段階に相当し、15世紀中葉に位置付けられる。屋敷地Cの土坑SK076から出土した。117は灰釉燭台で、上下2段の受皿のうち上段を欠くが、残存高21cmをはかる大型品である。古瀬戸後III期に相当し、15世紀前葉に位置付けられる。屋敷地Bの土坑SK153から出土した。

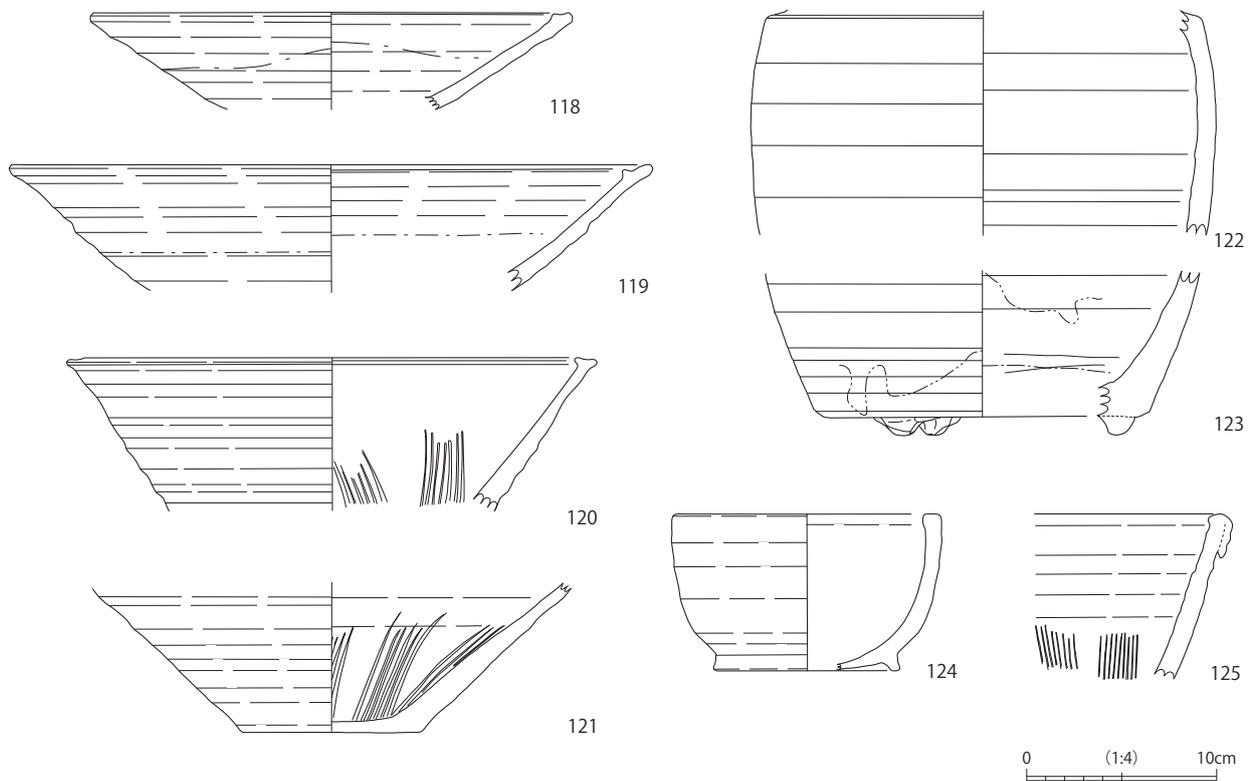
118・119は灰釉卸目付大皿で、古瀬戸後IV期新段階に相当する製品である。118はSD079、119はSK114西側の柱穴SP0617から出土した。

120・121は播鉢である。いずれも底部外面以外に錆釉を施す。120は内面に6条あるいは7条1単位の播目を施した播鉢で、古瀬戸後IV期古段階に相当する製品である。SK037から出土した。121は内面に6条1単位の播目が施された播鉢で、内面下半部はよく研磨され、使い込まれている。底部外面は未調整で回転糸切痕が残る。古瀬戸後期後半の製品で、SK037から出土した。

122・123は桶で、同一個体になる可能性が高い。いずれも内外面は鉄釉を施す。123は腰部以下に錆釉を施す。底面は露胎になっている。古瀬戸後期末から大窯第1段階に相当する製品と考えられる。122はSD120底面、123はSD121からそれぞれ出土した。

中国産磁器 (第39図) 中国産磁器には、青磁碗11点、白磁碗が1点ある。細片化したものが多く、図化したのは2点のみである。

126・127は龍泉窯系の青磁蓮弁文碗で、13世紀中頃～後半の製品と考えられる。126はSK140に重複した柱穴SP0666、127は屋敷地Bの柱穴SP0715から出土した。この他、小破片ながら屋敷地Bの柱穴SP0615から13世紀中頃の青磁蓮弁文碗(写真図版34-220)が出土した他、SK052から内面に陰刻草花文がある青磁蓮弁文碗(写真図版34-221)が出土しており、13世紀中頃から後半代の製品と思われる。SD127からは外面無文、内面に陰刻草花文がある青磁碗(写真図版34-222)が出土しており、12世紀末から13世紀前半頃の製品と思われる。

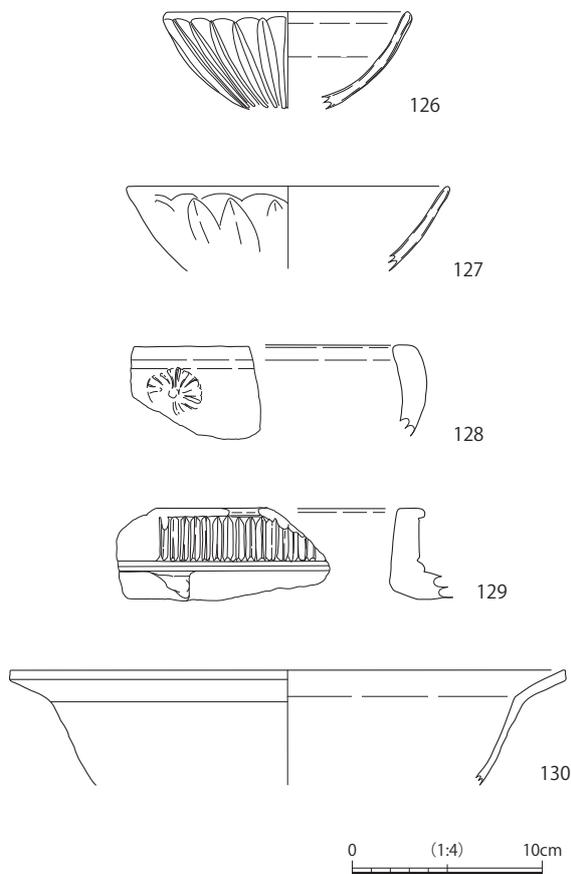


第38図 出土遺物実測図⑤

瓦質土器（第39図） 瓦質土器は4点出土した。このうち図化できたのは3点である。

128はいわゆる奈良火鉢の丸形浅鉢で、体部外面に菊花文のスタンプを捺印する。14世紀後葉～15世紀前半の製品で、井戸 SE003 南西の SK101 から出土した。129は口縁部に連子文を施す大和産の風炉で、15世紀代の製品である。SD079 から出土した。130は瓦質土器の鍋で、16世紀代の製品と考えられる。SD090 から出土した。なお細片のため図化してないが、128と同時期の丸形浅鉢が SK114 から出土した。

常滑産陶器（第40図） 常滑窯産陶器は遺物収納コンテナで約4箱分出土した。これには、甕（131～141）、玉縁壺（142）、片口鉢Ⅱ類（143～145）、羽釜（147）があり、この他、細片のため図化しなかったが、広口瓶、三筋壺なども出土した。時期的には、12世紀中頃から16世紀後半代の製品までであるが、14世紀代の製品は比較的少なく、15世紀代の製品が中心である。



第39図 出土遺物実測図⑥

131～141は甕である。131は口縁端部の内側に幅広い凹線が巡る甕で、常滑窯編年1b型式期に相当し、12世紀中頃に位置付けられる。SD120 から出土した。132は断面L字形の受け口状口縁の甕で、常滑窯編年第5型式期に相当し、13世紀前半葉に位置付けられる。SK092 から出土した。133は断面N字形の口縁をもつ甕で、常滑窯編年6b型式期に相当し、13世紀後葉に位置付けられる。屋敷地A北側の SK049 から出土した。

134・135は大甕である。134は常滑窯編年8型式期に相当する製品で、14世紀前半に位置付けられる。SK115 から出土した。135は胴部径が90cmを超えると推定される大型の甕である。常滑窯編年9型式期に相当する製品で、15世紀前半に位置付けられる。SE003 から出土した。

136～138は常滑窯編年10型式期に相当する甕で、15世紀後半に位置付けられる。136はSK063、137はSD079、138はSK092からそれぞれ出土した。139は常滑窯編年11型式期に相当する甕で、16世紀後半に位置付けられる。遺物包含層から出土した。140は甕下半部の破片で、内面の底部付近が滑らかになっており、片口鉢に転用されたと考えられる。14世紀から15世紀前半に位置付けられる。SK037 から出土した。141は常滑窯編年1b型式期に相当する甕で、12世紀中頃に位置付けられる。SK092 から出土した。

142は玉縁壺の底部片で、底部外面に「×」字の窯記号がへら描きされる。遺物包含層から出土した。14世紀代の製品と考えられる。

143～145は片口鉢Ⅱ類である。143・144の内面は良く使い込まれている。143は15世紀前半の製品で、SE001 から出土した。144は15世紀代の製品で、SD126 から出土した。145は卸目付の片口鉢Ⅱ類で、9条1単位の卸目が施される。15世紀後半代の製品で、SD017 から出土した。

147は羽釜で、内外面ともに回転ナデを施す。12世紀後半代の製品である。SD079 から出土した。

第3節 近世の土器・陶磁器

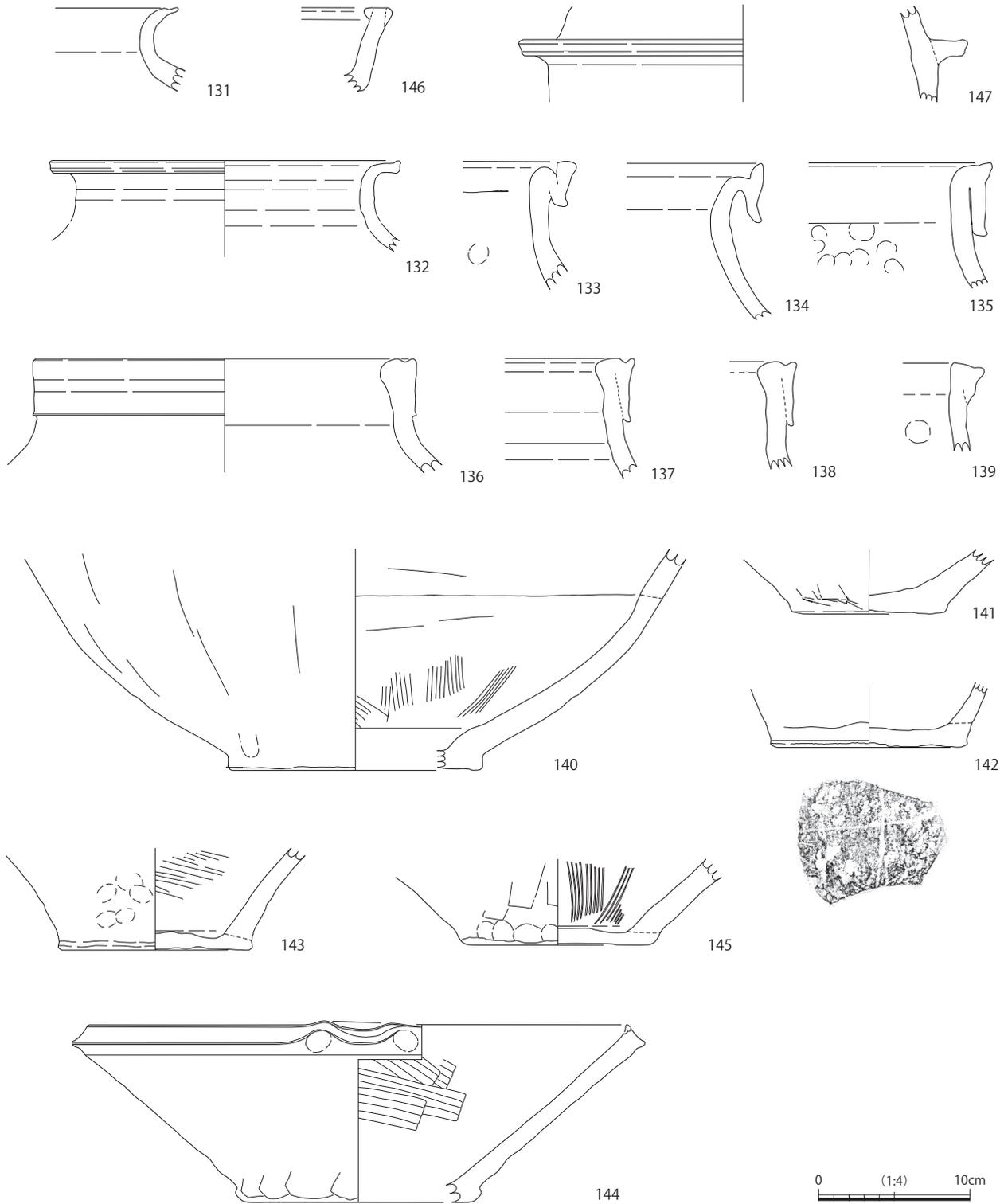
近世の土器・陶磁器は遺物収納コンテナで約1箱分出土した。これには、土師器、瀬戸・美濃窯

産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前系磁器などがある。大半が屋敷地Cで出土しており、付近にこの時期の建物があった可能性が高い。

土師器 (第35図) 23はロクロ整形皿である。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿に使用されたと考えられる。近世初頭の製品で、SD079最上

層から出土した。

瀬戸・美濃窯産陶器 (第38図) 124は瀬戸窯産の片口である。内外面は鉄釉、腰部以下は高台内面まで錆釉を施釉する。登窯期の製品で、18世紀代に位置付けられる。SD121から出土した。125は瀬戸窯産の挿鉢である。内外面ともに濃い錆釉



第40図 出土遺物実測図⑦

を施釉する。江戸時代の製品でSD090から出土した。なお図化しなかったが、SD072から江戸時代の瀬戸窯産の播鉢が出土したほか、SD121から17世紀代の瀬戸窯産の播鉢が出土した。

常滑窯産陶器（第40図） 146は平面箱形のいわゆる赤物の長火鉢で、江戸時代の製品と思われる。遺物包含層から出土した。このほか、遺物実測図としては図化しなかったが、埋喪遺構SK094から出土した18世紀代の赤物甕がある。

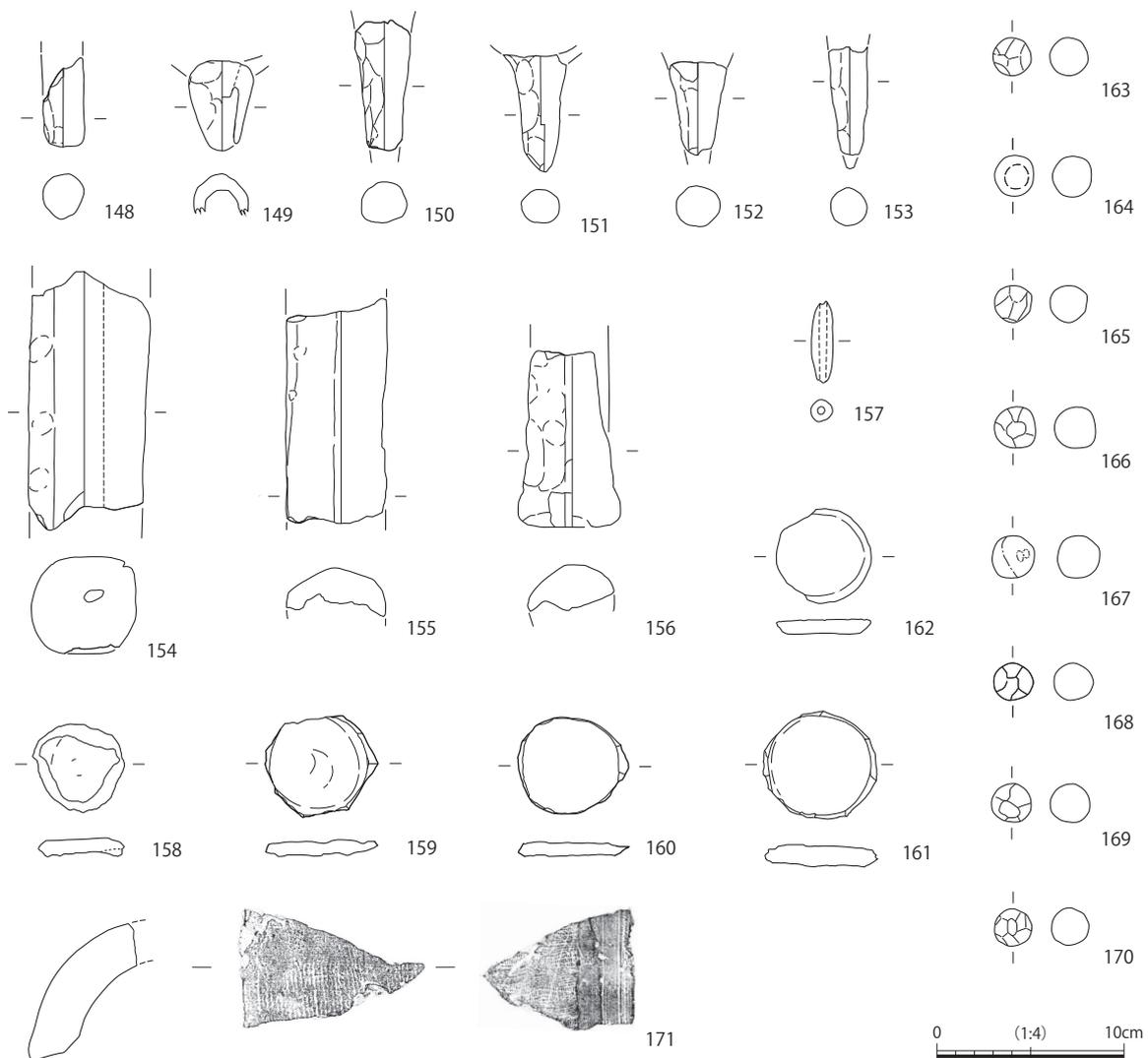
第4節 製塩土器

製塩土器（第41図） 製塩土器（148～153）は6点出土した。いずれも脚部を残すのみである。

148は円柱状の脚部の下端が平坦な製塩土器で、三河湾島嶼部の篠島式VI類の特徴に類似しており、

古墳時代後期後半の製品と思われる。149は脚部が中空で全体に赤褐色を呈する土器で、製塩土器と思われるが型式は不明である。150は中実で握り放ちのままの成形手法から、7世紀代の知多式3類と思われる。151～153は脚部先端が先尖りの製塩土器で、残りが悪く詳細な時期は不明だが、知多式3類もしくは4類と考えられる。古代の製品であろう。148はSD060、149はSK066、150・152は遺物包含層、151・153はSD079からそれぞれ出土した。

石丸遺跡の南約500mには、古代製塩遺跡の惣作遺跡が位置しており、周辺には数多くの製塩遺跡が展開していた可能性が高い。今回出土した製塩土器は、近隣の製塩遺跡から持ち込まれた製品であろう。



第41図 出土遺物実測図⑧

第5節 土製品・瓦

土製品には、棒状土製品(154～156)、土錘(157)加工円盤(158～161)、陶丸(163～170)、トチン(162)、瓦(171)がある。

棒状土製品(第41図) 154～156は棒状土製品である。154は四角柱状の製品で、中空のため棒状器具に粘土を巻きつけて成形したと考えられる。残存長13cm、最大径6.2cmを測る。摩滅のため調整は不明である。全体に被熱して明赤褐色を呈する。155は多角柱状の製品で、残存長11.4cm、最大径5.3cmを測る。摩滅のため調整は不明である。全体に被熱して明赤褐色を呈する。156は多角柱状の製品で、天地不明だが受部と見られる箇所が残存する。残存長9.4cmを測る。全体に被熱して明赤褐色を呈する。154はSK092、155はSE001、156はSB05の構成柱穴SP0634からそれぞれ出土した。他に小破片がSK018から出土した。類似品が惣作遺跡⁽⁹⁾、豊明市大脇城遺跡⁽¹⁰⁾、東浦町天白遺跡⁽¹¹⁾で出土しているが、詳細な時期・用途は不明である。

土錘(第41図) 157は土師質の管状土錘である。中央部が膨らむ紡錘形で、長さ4.4cm、幅1.1cm、重さ5gの小型品である。SD126から出土した。

加工円盤(第41図) 158～161は加工円盤である。いずれも山茶碗底部の縁部を打ち欠いて成形している。161は側面部が滑らかになっており、打ち欠き後に研磨されたか、使用により摩滅したと考えられる。158は初期山茶碗第4型式の小碗の底部、159は尾張型山茶碗第7型式の小皿の底部、160は14世紀代の小皿の底部、161は尾張型山茶碗第9型式の山茶碗の底部を素材にしている。158・159はSD079、160はSK035、161はSK058からそれぞれ出土した。

窯道具(第41図) 162は薄い円盤状を呈する窯道具のトチンで、江戸時代頃の製品と考えられる。SB01北東部の柱穴SP0184から出土した。

陶丸(第41図) 163～170は陶丸である。いずれも手づくねにより球形に仕上げられており、直径2cm前後、重さは10～12gをはかる。

163と164は遺物包含層、165は屋敷地Aの柱穴SP0116、166はSK114、167はSK008、168

は屋敷地Bの柱穴SP0055、169はSB10の柱穴SP0694、170はSD011から出土した。

瓦(第41図) 171は丸瓦、あるいは軒丸瓦の丸瓦部と考えられる破片で、凹面に布目圧痕、凸面に縦位の縄叩き目を残す。縄叩き目は一部をナデ消す。焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。詳細な時期は不明だが、焼成・胎土などの諸特徴から12世紀前半頃の製品と思われる。屋敷地CのSK064から出土した。

第6節 石器・石製品

石器・石製品には、石器(172)、石硯(173)、砥石(174～178)がある。

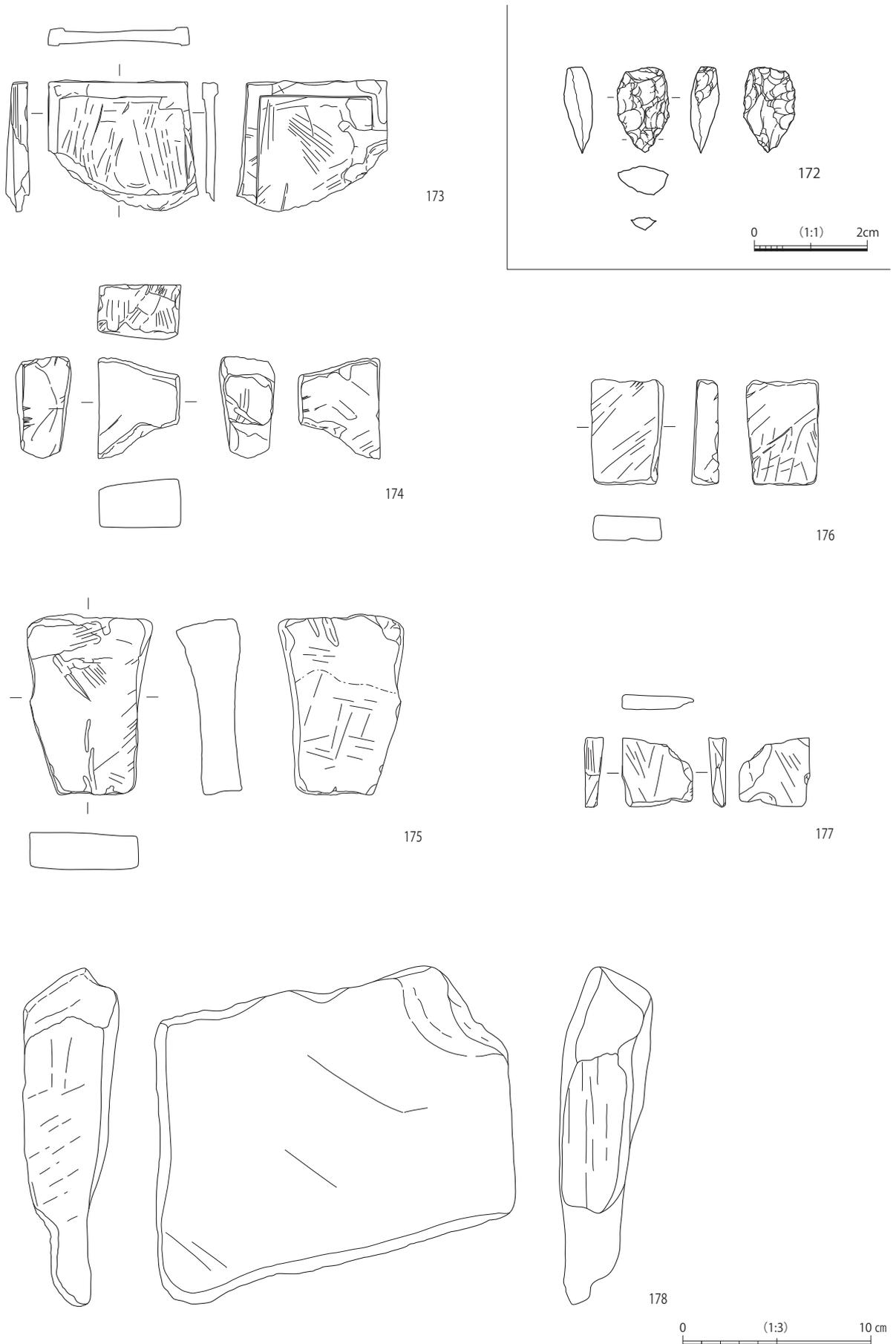
石器(第42図) 172は暗緑色～暗紫色のチャート素材とする石器である。最大長1.5cm、最大幅0.9cm、最大厚0.5cmを測る。横長剥片を横方向に使って、押圧剥離によって器面の成形が進められている。成形加工は、実測図上側を、左面、右面の順に施され、続いて実測図下側が片面加工される。どの部位も、縁辺の形状を見定めながら、行きつ戻りつしながら進められている。とりわけ、実測図下側の成形は入念で、尖頭部を作出する。実測図上側の不整形な断面形状は、素材剥片の末端形状に由来するが、それにもかかわらず加工が進められている。また、肉厚の断面形状とは裏腹に厚みを減じる加工意図が認められない。これらの点から、本資料は石鏃とは考えられず、石錐かその未成品と判断するのが妥当である。100～200倍の顕微鏡観察では、石器のほぼ全周でわずかな磨耗痕が検出できたが、堆積過程の影響だろう。石錐としての使用には至っていないと考えられる。

屋敷地B中央部の遺物包含層から出土した。

石硯(第42図) 173は粘板岩製の石硯で、両面とも硯面に使用されている。残存長6.9cm、幅7.7cm、厚さ1.0cm、重さ78gをはかる。海部の最も薄い部分は厚さ4mmと薄くなっており、限界まで使い込まれたと考えられる。各面に文字などの線刻は認められない。方形竪穴状土坑SK037から出土しており、15世紀代の硯と考えられる。

砥石(第42図) 174～178は砥石である。

174は砂質凝灰岩製の板状砥石で、残存長5.4



第42図 出土遺物実測図⑨

cm、幅 4.3cm、厚さ 2.9cmを測る。断面形は長方形を呈する。砥面は表・裏面、左右両側面の4面ある。SK058 から出土した。175 は砂質凝灰岩製の板状砥石で、全長 9.2cm、幅 6.7cm、厚さは 3.3cmを測る。断面形は長方形を呈する。砥面は表・裏面と左側面の3面ある。右側面は二次焼成を受けて赤変している。SK092 から出土した。176 は緑色凝灰岩製の砥石で、残存長 5.6cm、幅 3.8cm、厚さ 1.4cmを測る。断面形は長方形を呈する。砥面は表・裏面の2面ある。SK155 から出土した。177 は泥質凝灰岩製の板状砥石で、残存長 3.7cm、幅 3.7cm、厚さ約 1cmを測る。断面形は長方形を呈する。砥面は表・裏面、左右両側面の4面ある。SK154 から出土した。178 は片麻岩製の板状砥石で、全長 18.8cm、幅 15.3cm、厚さ約 5cmを測る。大型品である。断面は長方形を呈する。砥面は左右両側面と上側面の3面で、最も広い表・裏面に砥面はみられない。大型品のため、地面に固定して使用した製品であろう。掘立柱建物 SB06 の柱穴 SP0577 底面から根石に転用された状態で出土した。

第7節 金属製品・鍛冶関連遺物

金属製品には、鉄釘（179～181）、銭貨（182）、靱尻金具（183）、また、鍛冶関連遺物として、鉄滓（184～186）、炉壁（187～191）がある。

鉄釘（第43図） 179～181は鉄釘である。

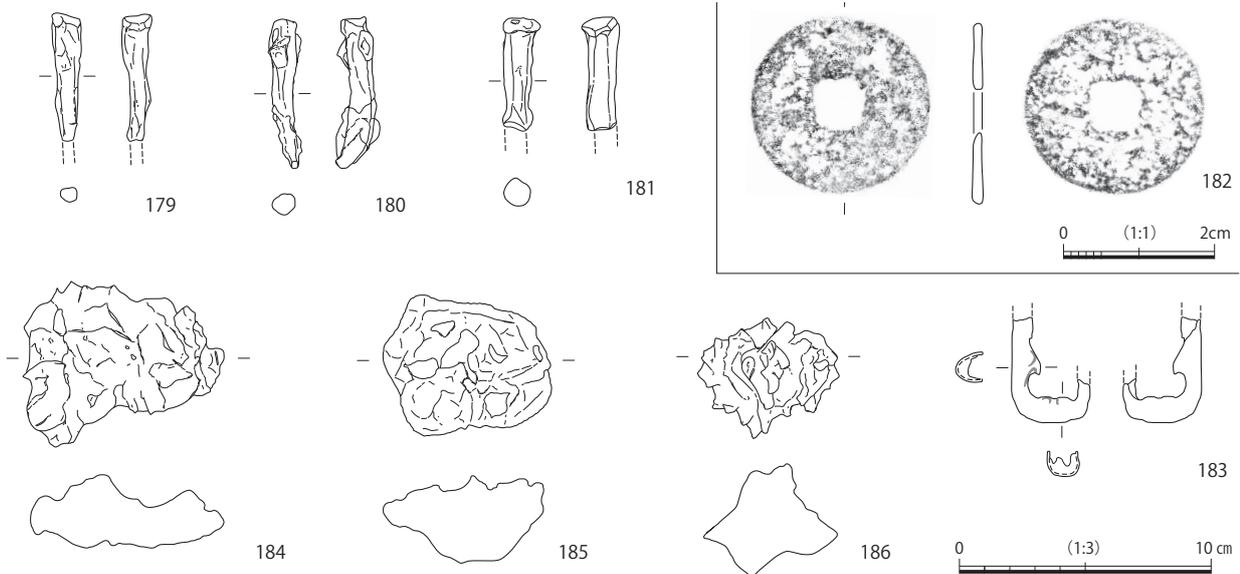
179は頭部が方形の鉄釘で先端部を欠損する。残存長 5.1cm、径 0.7cmを測り、断面形は方形を呈する。SK092 から出土した。180は中程から曲がった状態で出土した鉄釘で、頭部は先端部より太いが明確な形状を作り出していない。長さ 6.0cm、径 1.0cmを測る。断面形は方形を呈する。掘立柱建物 SB10 の柱穴 SP0694 から出土した。181は頭部が方形の鉄釘で、先端部を欠損する。残存長 4.5cm、径 1.0cmを測り、断面形は方形を呈する。SB06 南東の柱穴 SP0606 から出土した。

銭貨（第43図） 銅銭は2点出土したが、いずれも鑄上りが悪く錆も多く発生しており、図化できたのは182のみである。銭文不明の銅銭で、直径 2.4cm、重さは 3gをはかる。SK149 から出土した。中世の銭貨と思われる。

靱尻金具（第43図） 183は小型の太刀もしくは刀の靱尻金具と思われる製品で、残存長 4.2cm、幅 3.1cm、厚さ 1.3cm、重さは 8gをはかる。全体に錆が発生して残りが悪いが、部分的に金箔状の被膜が確認でき、金銅装あるいは象嵌が施されていた可能性がある。内部には木質が残存する。

屋敷地 B の SK154 北東部の柱穴 SP0735 から出土した。相伴遺物がなく詳細な時期は不明だが、他の遺構との重複関係からみて、中世に属すると考えられる。靱尻金具も中世の遺物であろう。

鉄滓（第43図） 鉄滓は全部で5点出土した。



第43図 出土遺物実測図⑩

このうちの3点(184～186)を報告する。

184は碗形鉄滓で、最大長7.7cm、厚さ約3cm、重さは160gをはかる。上部に白色石材を含む。SK092から出土した。185は碗形鉄滓で、最大長6.6cm、厚さ5.5cm、重さは138gをはかる。遺物包含層から出土した。186は碗形鉄滓で、最大長5.4cm、厚さ4.5cm、重さは70gをはかる。上部に木炭状の植物質痕と鉄釘片を多く含む。SD017から出土した。鉄滓は他に、屋敷地A北側のSP0413と遺物包含層から各1点ずつ出土した。

炉壁(写真図版37) 187～191はスサ入り粘土の炉壁である。フイゴの羽口などの取り付け部は残存していない。掘立柱建物SB02の柱穴SP0137から出土したほか、SD079、SK140などで出土した。

第8節 木製品

木製品(写真図版38)には、曲物(192～200)、板状木製品(201・202・209)、草履状木製品(203)、加工木(204～208)、棒状木製品(210・211)がある。いずれも井戸SE001掘形下部の暗灰色粘質土層から出土した。

曲物(写真図版38) 192～200は曲物である。

192は隅丸方形の曲物、あるいは柄杓の底板と思われる木製品で、残存長10.7cm、幅5.7cm、厚さ3～4mmを測る。一枚板と思われる。側面に木釘穴は認められない。193～200は曲物の側板と考えられ、残存長6.7～15.5cm、幅2.5～4.5cm、厚さは2～3mmを測る。195の右端には1列内に3段の切目が認められ、曲物の綴じ合わせ部と考えられる。194には側版を円筒形に曲げるための縦方向のケビキ線が認められる。

板状木製品(写真図版38) 201・202・209は板状木製品である。201は残存長14.0cm、幅2.2cm、厚さは4mmを測る。202は残存長16.5cm、幅2.0cm、厚さは3mmを測る。209は端部が炭化した、燃えさしである。残存長10cm、幅1.9cm、厚さ3mmを測る。断面形は長方形を呈する。

草履状木製品(写真図版38) 203は草履状木製品(板金剛)と思われ、藁あるいはイグサを編んだと思われる繊維が付着している。履物の鼻緒の小孔と横緒の切り欠きは残存していない。残存

長15.5cm、幅6.6cm、厚さは1.5～2mmを測る。

加工木(写真図版38) 204～208は加工木で、いずれも端部が炭化した、燃えさしである。

204はミカン割りされた製品で、薪に使用されたものであろう。残存長9.8cm、径4.0cmを測る。断面形は三角形を呈する。206は残存長7cm、径3.5cmを測る。断面形は円形を呈する。207は残存長11cm、幅1cm、厚さ3mm、208は残存長15cm、幅1.7cm、厚さは1.5cmを測る。205は木の節が抜けたような燃えさしで、自然木の可能性もある。

棒状木製品(写真図版38) 210・211は棒状木製品である。210は残存長12cm、幅4～6mm、径は2～3mmを測る。断面は楕円形を呈する。上・下端とも折損している。隅角は面取りされ、滑らかに仕上げられていることから、箸の可能性もある。211は残存長9.4cm、幅は2～4mm、厚さは1～2mmを測る。上端は折損している。隅角は面取りされ滑らかに仕上げられており、両端に向かうにつれ細く薄くなるよう仕上げられている。短いため箸とは考えにくい。

第9節 自然遺物

自然遺物には、貝類と脊椎動物遺体がある。貝類は井戸SE001～003、脊椎動物遺体は屋敷地Bの井戸SE003で出土した。

貝類(写真図版39) 212～219は、屋敷地Bの井戸SE003から出土した貝類で、オキシジミ(213・214)、マガキ(215)を主体に、ハマグリ(212)、ハイガイ(216)、ウミニナ(217)、アカニシ(218)、イボキサゴ(219)などが含まれる。

これらはいずれも内湾の砂泥層、もしくは内湾の岩礁や砂礫底のカキ礁に生息する貝類である。近隣の賢聖院貝塚や惣作遺跡の貝層においても、オキシジミ、ハイガイ、マガキを主体としており、いずれも石丸遺跡に近い旧衣ヶ浦湾で採取された貝類と考えられる。

脊椎動物遺体(第48図) 脊椎動物遺体には、屋敷地Bの井戸SE003の掘形下部から出土した二ホンイシガメ、カエル類、ヘビ類の骨がある。いずれも井戸廃棄後の堆積層から出土した。詳細は、第5章第2節で述べる。

第5章 自然科学分析

第1節 石丸遺跡出土土師器皿の胎土分析

藤根 久・米田恭子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和物で構成されるが、粘土材料は比較的良質と思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される(藤根・今村, 2001)。また、粘土自体に珪藻化石や放散虫化石が混在している場合があり、使用された粘土の堆積環境を推定できる。

縄文土器や弥生土器などの焼物材料として利用できる粘土材料は、固結していない地層、すなわち、およそ第三紀中新統以降の地層堆積物、第四紀鮮新統～更新統の段丘堆積物中の粘土質堆積物、そして断層粘土に限定できると考えられる(藤根, 1998; 藤根・小坂, 1997)。

土器胎土中の砂粒物は、これらの粘土質堆積物に付随する砂粒の可能性が高いが、祭祀用とされる土器など、意図的に混和している場合も考えられる。例えば、東海地域の弥生時代後期の赤彩されたパレススタイル土器では、パレススタイル土器のうち3分の1程度に砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている(藤根, 1998)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について、岩石・鉱物のほか微化石類やテフラなどの記載が重要であり、粘土や砂粒物、混和物の特徴について調べたうえで、周辺地質と比較・検討する必要がある。

ここでは、大府市北崎町城畑地内に所在する石丸遺跡より出土した中世の土師器皿について、薄

片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成などの特徴を調べ、土器の胎土材料について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は、中世の土師器皿6点である(表2)。

土師器皿片は、岩石カッターを用いて整形し、全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行った。これを、精密岩石薄片作製機で整形、研磨フィルムを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の土器薄片を作製した。最後に、仕上げとしてコーティング剤を塗布した。

薄片試料は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面に含まれる微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など)、鉱物、大型砂粒の特徴、その他の混和物などについて、観察と記載を行った。微化石類は、全体を300倍で観察した後、1500倍(油浸)で観察した。

ここで採用した微化石類や岩石、鉱物の各分類群の特徴は、以下の通りである。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉(1988)や安藤(1990)は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石(海水種、淡水種)を分類した。

表2 分析試料とその詳細

分析 No.	遺跡	種類	試料 No.	グリッド	遺構	時期	胎土の色調
1	石丸遺跡	土師器皿	第35図-16	L10	SP0718	中世	橙色系
2		土師器皿	第35図-18	I8	SK050		橙色系
3		土師器皿	第35図-11	L3・L4	SK069		白色系
4		土師器皿	第35図-15	M3	SK091		灰黄色系
5		土師器皿	第35図-17	L9	SP0957		灰黄色系
6		土師器皿	第35図-22	J5・J6	SD120		黒色系

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状である。海綿動物の多くは海水産であるが、淡水産も23種ほどが知られ、湖や池、川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[胞子化石]

胞子は、直径約10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難な場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）によく見られる。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼ではビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼では緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類や、ケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類、火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型：記載ではバブル型と略す）や、小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[緑れん石]

緑色～淡緑色のサイコロ状鉱物で、屈折率が高く、異常干渉色を示す。緑色片岩に特徴的に含まれる。

[ザクロ石]

無色透明の屈折率の高いサイコロ状鉱物である。変成岩中にごく普通に産出し、火山岩中にも含まれる。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩、千枚岩と考えられる。なお、ホルンフェルスも片理複合石英類を示す。

[複合石英類]

複合石英類は、石英が集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、粒径が0.01mm未満の粒子を微細、0.01～0.05mmの粒子を小型、

0.05～0.10mmの粒子を中型、0.10mm以上の粒子を大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[斑晶質・完晶質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。直交ニコルの観察において結晶度が高い岩石片である。

[流紋岩質]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、主に流理構造を示す岩石である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、直交ニコルの観察において結晶度が低く、全体的に暗い岩石片である。

[ホルンフェルス]

前述の片理複合石英類のほか、泥岩質あるいは凝灰岩質のうち構成粒子あるいは粒子境界が不鮮明で、やや斑状組織を呈する濁った粒子である。直消光において全体的に暗い。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3. 結果および考察

偏光顕微鏡による各土器薄片の観察結果を述べる。粒子組成については、微化石類や岩石片、鉱物を記載するために、プレパラート全面を精査した。

以下では、粒度組成や、0.1mm前後以上の岩石片・鉱物の砂粒組成、微化石類などの記載を示す。なお、表3における不等号は、量比の概略を示す。また、表4の記号については、●は極めて多い、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、一は不検出を示す。

3.1. 微化石類による粘土材料の分類

土師器皿薄片の全面を観察した結果、微化石類（珪藻化石、骨針化石）が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数100 μm、珪藻化石が10～数100 μm、骨針化石が10～100 μm前後である（植物珪酸体化石は10～50 μm前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm以下、シルトが約3.9～62.5 μm、砂が62.5 μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、2003）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は粘土中に含まれると考えられる。植物珪酸体化石以外の微化石類は、粘土の起源（粘土層の堆積環境）を知るのに有効な指標になる。植物珪酸体化石は、土器製作の場で灰質に伴って多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を必ずしも指標するとは限らない。

土師器皿の胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a) 海水干潟～沼沢湿地成粘土、b) 海成～沼沢湿地成粘土、c) 淡水成粘土、d) 水成粘土、の4種類に分類された（表4）。以下では、それぞれの粘土の特徴について述べる。

a) 海水干潟～沼沢湿地成粘土（3胎土：分析No.4～6）

これらの土師器皿胎土中には、海水泥質干潟指標種群 *Nitzschia cocconeiformis* や *Diploneis smithii* が特徴的に多く含まれ、沼沢湿地付着生指標種群 *Pinnularia viridis* なども含まれていた。また、海綿動物の骨格をなす骨針化石も多く含まれていた。これらの海水泥質干潟指標種群や沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石は、海水干潟～沼沢湿地環境で堆積した堆積物と考えられる。

b) 海成～沼沢湿地成粘土（1胎土：分析No.1）

この土師器皿胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群 *Eunotia praerupta* var. *bidens* や *Cymbella aspera* などが特徴的に含まれていた。なお、海水種珪藻化石も含まれていた。また、海綿動物の骨格をなす骨針化石も非常に多く含まれていた。これら珪藻化石は、同時に地層として堆積したと考

表3 試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載

分析No.	試料No.	器種	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	図35-16	土師器 III	100 μm ~ 330 μm	0.91mm	珪藻化石（海水種 <i>Grammatophora macilentata</i> 、 <i>Campylodiscus echeneis</i> 、 <i>Coscinodiscus</i> 属 / <i>Thalassiosira</i> 属、沼沢湿地付着生 <i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> 、 <i>Cymbella aspera</i> 、淡水種 <i>Aulacoseira pensacolatae</i> 多産、 <i>Rhopalodia gibberula</i> 、 <i>Gomphonema</i> 属、 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Diploneis</i> 属、 <i>Eunotia</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、陸域 <i>Hantzschia amphioxys</i> 、 <i>Pinnularia borealis</i> 、不明種破片）、骨針化石（1,169）、胞子化石、植物珪酸体化石多産	石英・長石類斜長石（双晶）、ガラス質（バブル型・大型の軽石型）複合石英類（微細）、複合石英類（大型）、ジルコン、複合石英類（中型）、角閃石類（ガラス付着）、カリ長石（パーサイト）
2	図35-18	土師器 III	120 μm ~ 400 μm	0.79mm	珪藻化石（淡水種 <i>Pinnularia</i> 属）、骨針化石（9）、胞子化石、植物珪酸体化石多い	石英・長石類>ガラス質（バブル型）、複合石英類（微細）>斜長石（双晶）、カリ長石（微斜長石構造）、複合石英類（大型）、角閃石類、複合石英類（小型）、ジルコン、雲母類、石英・長石類>複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、斜方輝石、複合石英類（大型）、ガラス質（バブル）、ジルコン、角閃石類
3	図35-11	土師器 III	80 μm ~ 400 μm	1.11mm	珪藻化石（陸域 <i>Hantzschia amphioxys</i> ）、骨針化石（1）、胞子化石、植物珪酸体化石（イネ型短細胞珪酸体列ほか）	石英・長石類>ガラス質（バブル型、軽石型）、凝灰岩質）角閃石類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、ジルコン
4	図35-15	土師器 III	60 μm ~ 130 μm	0.42mm	珪藻化石（海水泥質干潟 <i>Nitzschia coconeiformis</i> 多産、 <i>Diploneis smithii</i> 多）、 <i>Tryblionella granulata</i> 多い、内湾 <i>Palatia sulcata</i> 、海水種 <i>Grammatophora macilentata</i> 、 <i>Auliscus caelaetus</i> 、 <i>Campylodiscus echeneis</i> 、 <i>Coscinodiscus</i> 属 / <i>Thalassiosira</i> 属、汽水泥質干潟 <i>Terpsionoe americana</i> 、汽水種 <i>Navicula yarrensii</i> 、沼沢湿地付着生 <i>Cymbella aspera</i> 、淡水種 <i>Aulacoseira pensacolatae</i> 、 <i>Rhopalodia gibberula</i> 、 <i>Aulacoseira</i> 属、 <i>Diploneis</i> 属、 <i>Navicula</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、不明種破片）、骨針化石（399）、胞子化石多産、植物珪酸体化石多産	石英・長石類>ガラス質（バブル型、軽石型）、凝灰岩質）角閃石類、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、ジルコン
5	図35-17	土師器 III	60 μm ~ 90 μm	0.67mm	放散虫化石、珪藻化石（海水泥質干潟 <i>Nitzschia coconeiformis</i> 多産、 <i>Diploneis smithii</i> 多い、海水種 <i>Auliscus caelaetus</i> 、 <i>Campylodiscus echeneis</i> 、 <i>Coscinodiscus</i> 属 / <i>Thalassiosira</i> 属、沼沢湿地付着生 <i>Pinnularia viridis</i> 、 <i>Stauroneis phoenicenteron</i> 、淡水種 <i>Rhopalodia gibberula</i> 、 <i>Diploneis ovalis</i> 、 <i>Aulacoseira</i> 属、 <i>Nitzschia</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Stauroneis</i> 属、 <i>Surirella</i> 属、不明種破片）、骨針化石（833）、胞子化石多産、植物珪酸体化石多産	石英・長石類>ガラス質（バブル型）、雲母類、斜長石（双晶）、凝灰岩質、複合石英類（小型）、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石、角閃石類、ジルコン
6	図35-22	土師器 III	120 μm ~ 300 μm	0.48mm	珪藻化石（海水泥質干潟指標種 <i>Nitzschia coconeiformis</i> 多産、内湾 <i>Palatia sulcata</i> 、 <i>Diploneis smithii</i> 、 <i>Tryblionella granulata</i> 、汽水砂質干潟 <i>Navicula alpha</i> 、海水種 <i>Auliscus caelaetus</i> 、 <i>Campylodiscus echeneis</i> 、 <i>Coscinodiscus</i> 属 / <i>Thalassiosira</i> 属、沼沢湿地付着生 <i>Pinnularia viridis</i> 、淡水種 <i>Diploneis yatukenaensis</i> 、 <i>Rhopalodia gibberula</i> 、 <i>Aulacoseira</i> 属、 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Diploneis</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Placoneis</i> 属?、不明種破片）、骨針化石（637）、胞子化石多産、植物珪酸体化石多産	石英・長石類>ガラス質（バブル型・軽石型）、凝灰岩質、雲母類、複合石英類（大型）、斜長石（双晶・累帯）、複合石英類（小型）、カリ長石（パーサイト）、角閃石類、斑晶質、ジルコン

表4 胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表

分析 No	器種	粘土の特徴						砂粒の特徴							鉱物の特徴						その他の 特徴				
		種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	A・a	B・b	C・c	D・d	E・e	F・f	G・g	石英	斜長石(双晶・異帯)	カリ長石(パーサイト)	ジルコロン		角閃石類	輝石類	雲母類	植物珪酸体化石
1	土師器 皿	海成～ 沼沢湿地成	-	○	●	◎	●	◎	-	△	△	-	△	△	-	△	●	○	△	△	△	△	△	●	角閃石を含むテフ ラ、細粒質
2	土師器 皿	淡水成	-	-	△	○	○	Bc	-	△	○	-	-	-	-	○	●	○	○	△	△	△	◎		
3	土師器 皿	水成	-	-	-	△	△	(Bc)	-	△	△	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	-	△	砂粒が少なく粘土 質、イネ科植物遺 体	
4	土師器 皿	海水干潟～ 沼沢湿地成	-	●	◎	◎	●	◎	-	-	△	-	△	-	-	△	○	△	△	△	△	-	◎	砂粒が少ない	
5	土師器 皿	海水干潟～ 沼沢湿地成	△	●	◎	◎	●	(Bc)	-	-	△	-	-	-	-	○	○	△	△	△	△	△	●	砂粒が少ない	
6	土師器 皿	海水干潟～ 沼沢湿地成	-	●	◎	◎	●	(Bc)	-	△	△	-	△	-	-	○	○	△	△	△	△	△	◎	砂粒が少ない	

えられる。

c) 淡水成粘土 (1 胎土：分析 No.2)

この土師器皿胎土中には、淡水種珪藻化石 *Pinnularia* 属や骨針化石が含まれていた。

d) 水成粘土 (1 胎土：分析 No.3)

この土師器皿胎土中には、骨針化石のみが含まれていた。

3.2. 砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成される鉱物種や構造的な特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。したがって、胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類を構成する鉱物群は粒度が大きいため、細粒質の砂粒からなる胎土の場合には、深成岩類の推定が困難な場合が多い。

ここでは、比較的大型の砂粒と鉱物群の特徴により、起源岩石の推定を行った (表 4)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類 (A/a)、複合石英類 (大型) が深成岩類 (B/b)、複合石英類 (微細) などが堆積岩類 (C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類 (D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い火山岩が凝灰岩類 (E/e)、流紋岩質が流紋岩類 (F/f)、ガラス質がテフラ (G/g) である。

今回の土師器皿胎土中の砂粒組成は、表 5 の組み合わせに従って、すべて Bc 群に分類された。以下に、分類された砂粒物の特徴について述べる。

1) 主に深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群 (6 胎土：分析 No.1 ~ 6)

主に複合石英類 (大型) やジルコン・カリ長石などの鉱物群からなる深成岩類、複合石英類 (微細)

からなる堆積岩類で構成される。なお、分析 No.4 ~ 6 の胎土中では、岩石片からなる砂粒物が少なく、鉱物組成から (Bc 群) と推定した。

3.3. 遺跡周辺の地質環境

石丸遺跡は、鮮新世一前期更新世の礫・砂及び泥からなる瀬戸層群の矢田川層など (第 44 図の凡例 T2 または Sy) からなる丘陵部の端部に位置する。

周辺では、後期更新世の礫・砂及び泥からなる中位段丘堆積物 (凡例 tm)、中期更新世の礫・砂及び泥からなる高位段丘堆積物 (凡例 th)、前期一中期更新世の礫・砂及び泥からなる唐山層・八事層及び加木屋層 (凡例 Yk)、鮮新世一前期更新世の泥を伴う瀬戸層群の土岐砂礫層 (凡例 Sg) が分布する。

なお、遺跡の東側の山地には、後期白亜紀の白雲母黒雲母花崗岩及び黒雲母花崗岩 (凡例 G7) や角閃石黒雲母花崗岩・花崗閃緑岩及びトーナル岩 (凡例 G6) からなる新期領家花崗岩類が広く分布する。なお、南東側には山地ジュラ紀の砂岩・泥岩及びメランジ (凡例 Ms) やチャート (凡例 Mc) からなる美濃堆積岩コンプレックスなども分布する。

3.4. 土器材料の特徴

後期更新世の礫・砂及び泥からなる中位段丘堆積物 (凡例 tm) には、熱田海進期 (下末吉海進期) の海成層が堆積する (牧野内ほか, 2011)。土師器皿胎土の粘土中に含まれる海水泥質干潟指標種群や沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石は、海進期または海退期に形成された干潟あるいは沼沢湿地成の堆積物と考えられる。

遺跡の東側を流下する逢妻川東側地域には、標高 8m 前後の段丘平坦面が広がり、海進期または海退

表 5 岩石片の起源と組み合わせ

			第 1 出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第 2 出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

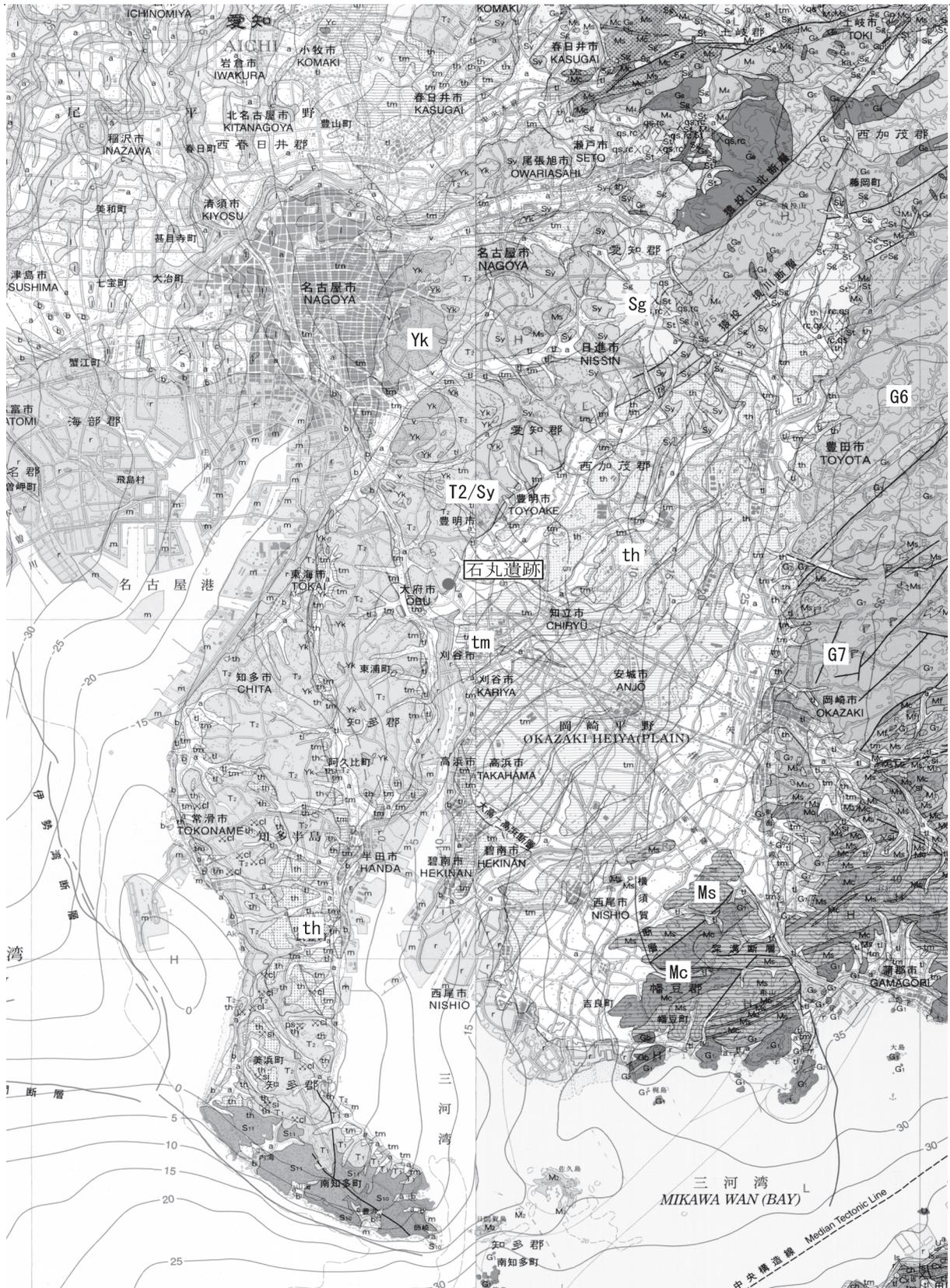
期に形成された干潟や沼沢湿地成の堆積物が堆積する。この中段丘堆積物に対比される熱田層中の珪藻化石では、淡水種や内湾種指標種群 *Palaria sulcata* などとともに、海水泥質干潟指標種群の *Diploneis smithii* や *Tryblionella granulata* などが検出されている（森，1980）。今回の土師器の粘土材料は、この堆積物を採掘すれば容易に得ることができ、土器の粘土材料として利用されたと考えられる。

土師器胎土中の砂粒は、比較的細粒または砂粒物の少ない組成であり、鉱物組成などから深成岩類と堆積岩類からなる Bc 群と推定されたが、東側の矢作川流域においては新期領家花崗岩類が広く分布し、この地域の砂粒組成として矛盾しない。

なお、粘土の種類は、a) 海水干潟～沼沢湿地成粘土、b) 沼沢湿地成粘土、c) 淡水成粘土、d) 水成粘土、の4種類に分類されたが、これらの違いは堆積物の層位の違いである可能性が高い。

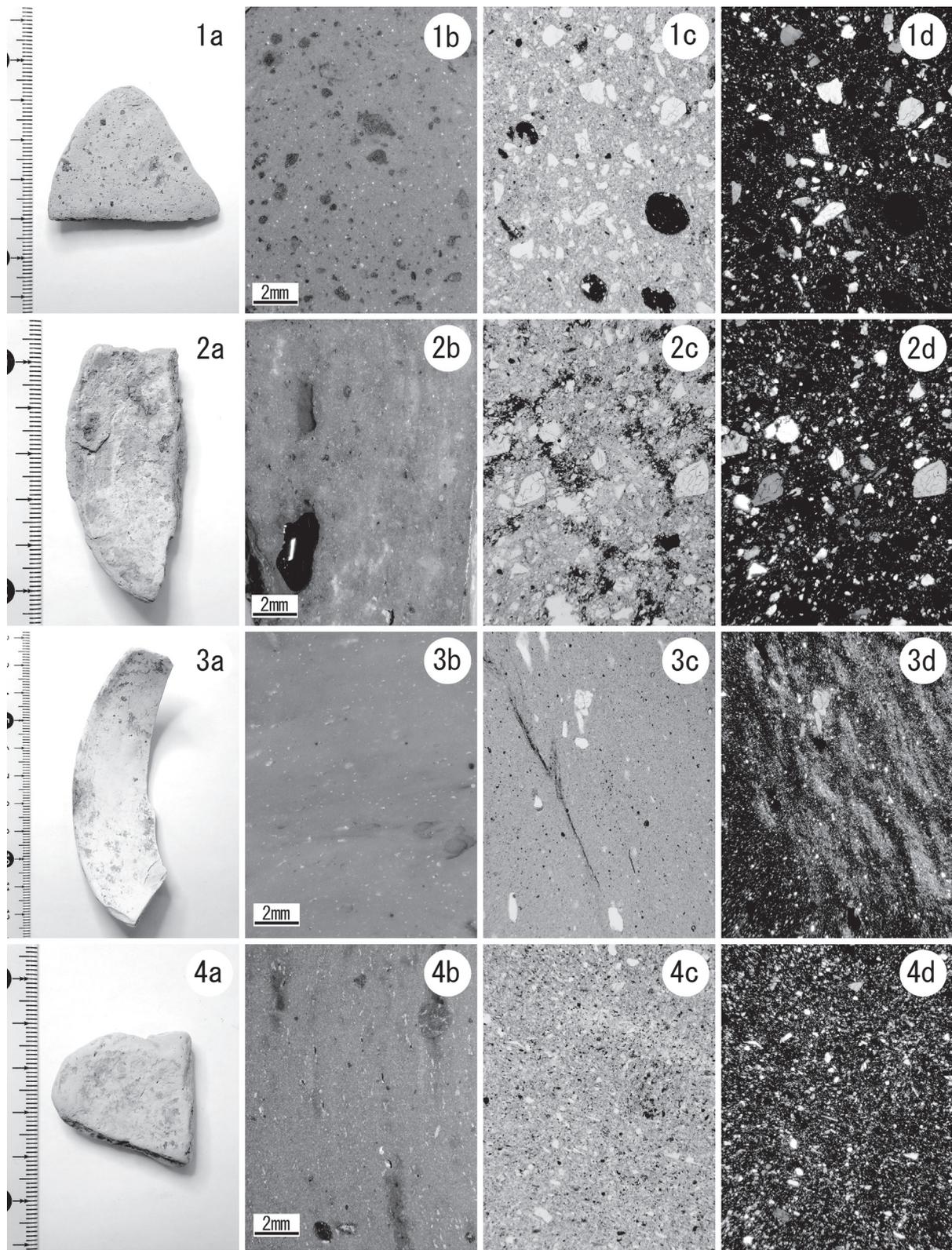
【引用・参考文献】

- ・安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42（2），73-88.
- ・地学団体研究会・地学事典編集委員会（2003）新版 地学事典。1443p，平凡社。
- ・藤根 久・小坂和夫（1997）生駒西麓（東大阪市）産の縄文土器の胎土材料—断層内物質の可能性—。第四紀研究，36，55-62.
- ・藤根 久（1998）東海地域（伊勢—三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料。東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ」：108-117，東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会。
- ・藤根 久・今村美智子（2001）第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277，日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- ・小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27，1-20.
- ・牧本 博・山田直利・水野清秀・高田 亮・駒沢正夫・須藤定久（2004）20万分の1地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」，産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- ・牧野内 猛・加藤麻衣・大石康雄・塚本将康・武邑圭司・大島 武・杉浦 武（2011）愛知県安城市の地下地質。地質学雑誌，117，79-94.
- ・水野清秀・小松原琢・脇田浩二・竹内圭史・西岡芳晴・渡辺 寧・駒澤正夫（2009）20万分の1地質図幅「名古屋 第3版」，産業技術総合研究所地質調査総合センター。
- ・森 忍（1980）濃尾平野下の熱田層のケイソウ群集。瑞浪市博物館研報，7，73-83.
- ・日本地質学会（2011）日本地方地質誌4「中部地方」，564 p，朝倉書店。



第44図 石丸遺跡と周辺の地質

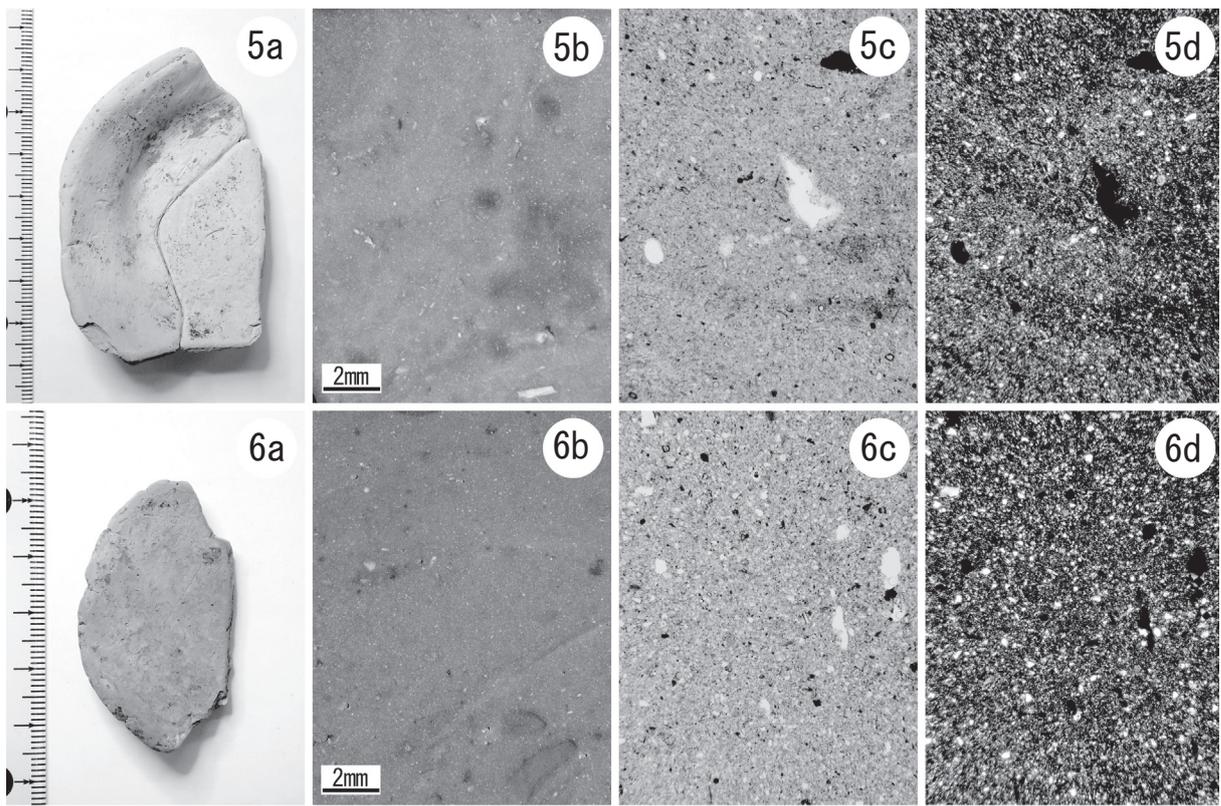
(牧本ほか (2004) 20万分の1地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」と水野ほか (2009) 20万分の1地質図幅「名古屋 第3版」を編集)



第 45 図 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真 (1)

(スケール ; 1c, 1d, 2c, 2d, 3c, 3d, 4c, 4d: 500 μ m)

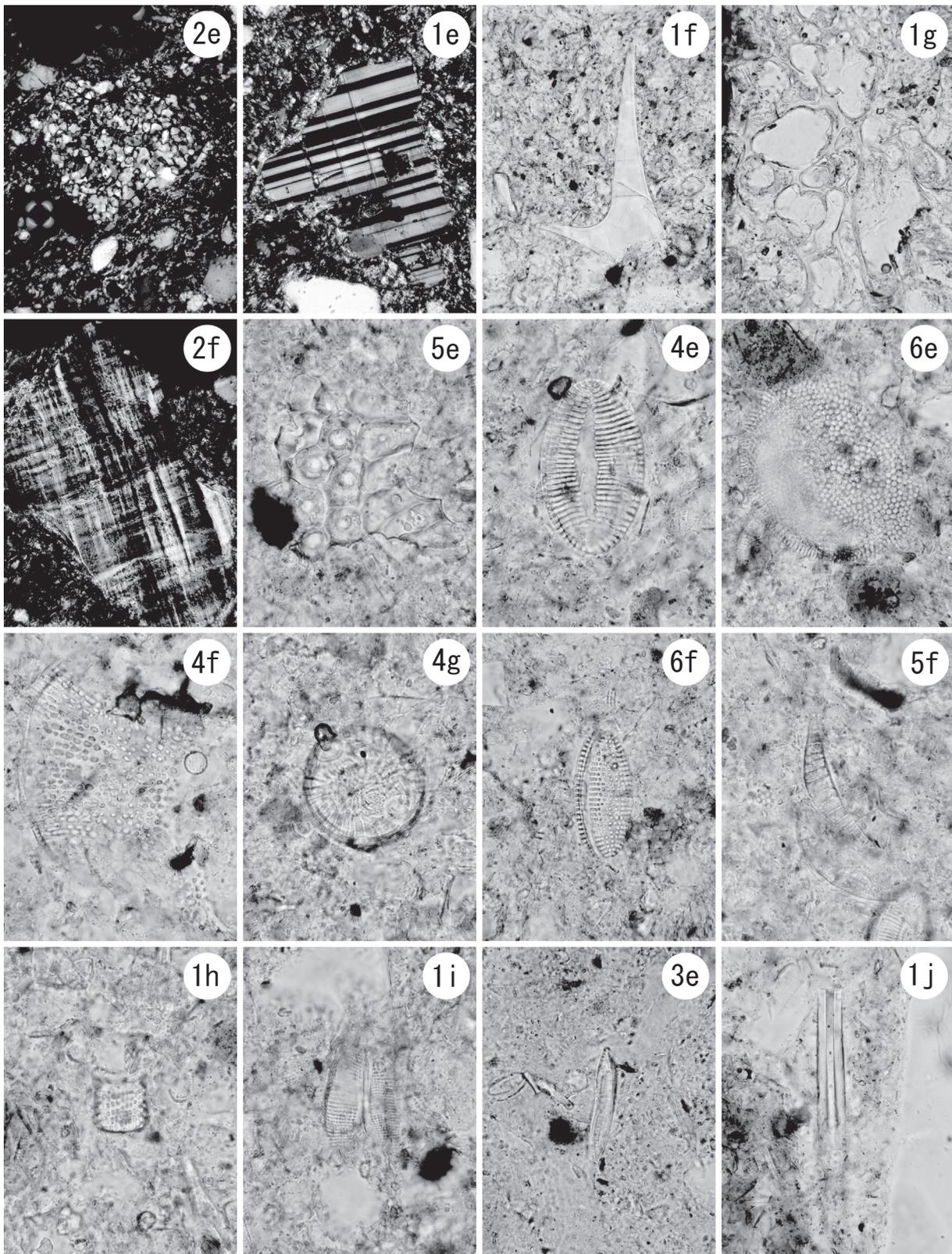
- | | | | |
|-------------|------------------|---------------------|---------------------|
| 1a. 分析No. 1 | 1b. 分析No. 1 (断面) | 1c. 分析No. 1 (解放ニコル) | 1d. 分析No. 1 (直交ニコル) |
| 2a. 分析No. 2 | 2b. 分析No. 2 (断面) | 2c. 分析No. 2 (解放ニコル) | 2d. 分析No. 2 (直交ニコル) |
| 3a. 分析No. 3 | 3b. 分析No. 3 (断面) | 3c. 分析No. 3 (解放ニコル) | 3d. 分析No. 3 (直交ニコル) |
| 4a. 分析No. 4 | 4b. 分析No. 4 (断面) | 4c. 分析No. 4 (解放ニコル) | 4d. 分析No. 4 (直交ニコル) |



第 46 図 分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真 (2)

(スケール ; 5c, 5d, 6c, 6d: 500 μ m)

5a. 分析No. 5 5b. 分析No. 5 (断面) 5c. 分析No. 5 (解放ニコル) 5d. 分析No. 5 (直交ニコル)
 6a. 分析No. 6 6b. 分析No. 6 (断面) 6c. 分析No. 6 (解放ニコル) 6d. 分析No. 6 (直交ニコル)



第 47 図 胎土の偏光顕微鏡写真

(スケール ; 2e: 100 μm , 1e, 1f, 1g, 2f: 50 μm , 5e, 4e, 6e, 4f, 4g, 6f, 5f, 1h, 1i, 3e, 1j: 20 μm)

2e. 複合石英類 (微細) 1e. 斜長石 (双晶) 1f. 火山ガラス (バブル型) 1g. 火山ガラス (軽石型)

2f. カリ長石 (微斜長石構造) 5e. 放散虫化石 4e. 珪藻化石 *Nitzschia cocconeiformis*

6e. 珪藻化石 *Coscinodiscus* 属 / *Thalassiosira* 属 4f. 珪藻化石 *Campylodiscus echeneis* 4g. 珪藻化石 *Auliscus caelaetus*

6f. 珪藻化石 *Tryblionella granulata* 5f. 珪藻化石 *Rhopalodia gibberula* 1h. 珪藻化石 *Aulacoseira pensacolae*

1i. 珪藻化石 *Cymbella aspera* 3e. 珪藻珪藻 *Hantzschia amphioxys* 1j. 骨針化石

第2節 井戸 SE003 における 動物遺存体同定

金原裕美子（一般社団法人
文化財科学研究センター）

1. はじめに

一般に日本の国土は、火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれていない。そのため、遺跡で動物遺存体が出土するのは、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されつつある。特に大部分が無機塩類（おもに炭酸カルシウム）からなる貝殻をもつ貝類は腐食に強く、土中でも残りやすい。それらの種類を同定し、その生態的情報を援用して当時のおもに水環境の復原や、種によっては水深を知ることができ、また、過去の人々の生業や食生活に関する情報を得ることができる。

2. 試料

試料は、N6・N7 グリッドの井戸 SE003 より出土したNo. 861、No. 862 の2点である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態の特徴および現生標本との対比によって同定を行った。

4. 結果

(1) 分類群

分析の結果、以下の3分類群が同定された。結果一覧を表6に示し、各試料の写真を示す。

〔両生類〕

カエル類 *Salientia* fam. indet.

〔爬虫類〕

イシガメ属 *Mauremys*

ヘビ類 *Colubridae* fam. indet.

(2) 動物遺存体の特徴

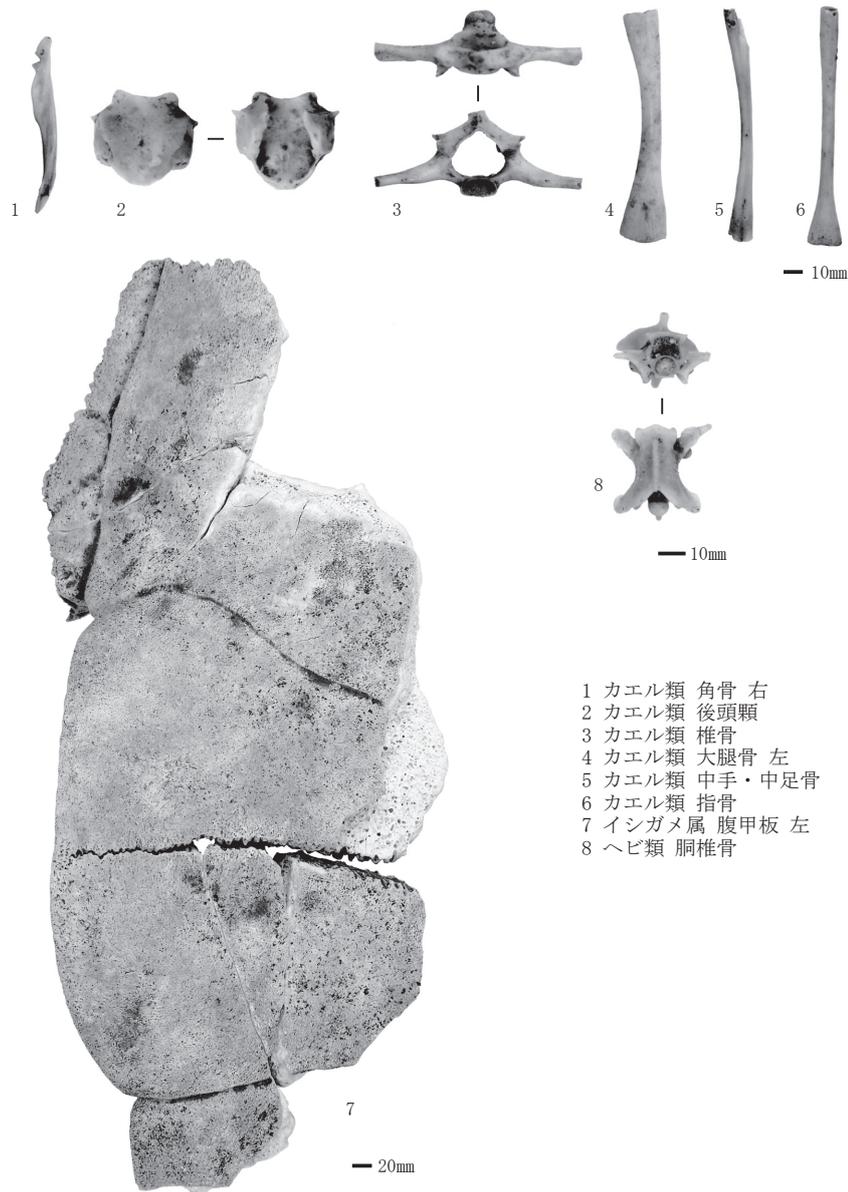
井戸 SE003 より出土した分類群は両生類のカエル類、爬虫類のイシガメ属、ヘビ類の3分類群であった。カエル類は湿った環境を好み、水田や淡

水域の河川などの浅い水域や土手、森林などに棲息する。イシガメ属は河川や湖などの淡水域周辺に棲息する。日本に棲息するイシガメ属にはニホンイシガメとクサガメがいるが、18世紀まではクサガメが日本にはおらず、ニホンイシガメだけではないかと言われていることから、本試料はニホンイシガメと考えられる。ヘビ類は比較的湿った環境を好み、田畑や淡水域の河川などの土手、森林に棲息する。いずれも淡水域の河川や湖、水田などに棲息する動物ばかりであり、人の生活域近辺に棲息している。

いずれも井戸からの出土だが、カエル類、ヘビ類は小さいこともあり、井戸に落ちたものが出土したと考えられる。なお、ヘビ類が井戸内に棲息していた可能性もある。イシガメ属は解体痕等は観察されなかったが比較的大きいため、井戸に落ちた可能性もあるが、食用となりその残渣が井戸に投棄された可能性がある。また、食物残渣が投棄されていた場合、ヘビ類が井戸内で棲息していた可能性があることから、試料が出土した第9層では井戸は水の採取を出来る程ではなく湿った程度の環境であった可能性がある。

【参考文献】

- ・ 疋田努・鈴木大（2010）江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入。爬虫両生類学会報 2010（1），爬虫両生類学会，p.41-46.



- 1 カエル類 角骨 右
- 2 カエル類 後頭顆
- 3 カエル類 椎骨
- 4 カエル類 大腿骨 左
- 5 カエル類 中手・中足骨
- 6 カエル類 指骨
- 7 イシガメ属 腹甲板 左
- 8 ヘビ類 胴椎骨

第48図 動物遺存体

表6 井戸 SE003 における動物遺存体同定結果

遺構	層位	結果 (学名/和名)	部位	部分	左右	個数	備考
SE003	第9層	<i>Mauremys</i>	腹甲板	腹甲板-股甲板	左	1	同一個体
		<i>Mauremys</i>	腹甲板	股甲板-肛甲板	左	1	
		<i>Mauremys</i>	腹甲板	不明破片		1	
SE003	第9層	<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	後頭顆		1	
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	角骨	半形	左	1
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	角骨	略完	右	1
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	椎骨	略完		2
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	大腿骨	略完	左	1
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	中手・中足骨	破片		4
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	指骨	破片		11
		<i>Salientia</i> fam. indet.	カエル類	不明	破片		18
		<i>Colubridae</i> gen.et sp.indet.	ヘビ類	椎骨	胴椎骨		4

第6章 遺構の変遷と総括

今回の調査は石丸遺跡の第1次調査として、遺跡東縁部の約2,200㎡の範囲で発掘調査を行った。

検出した遺構・遺物は、縄文時代から江戸時代に至るまで、大きくⅠ～Ⅵ期の6期に分けて変遷を考えることが可能である。

以下では、各画期ごとに遺構・遺物の変遷と課題を記述することで、本報告の総括としたい。

Ⅰ期：縄文・弥生時代

この時期の遺構は確認できなかったが、縄文時代以降の石錐あるいはその未製品と考えられるチャート製の石器が出土した。市域では共栄町の共栄遺跡と朝日町の棧敷貝塚で縄文時代の石鏃が採集・出土しているが、出土数は極めて少ない。

今回出土した石器は1点のみだが、この地の人々の営みが縄文時代にまで遡ることを示す遺物として貴重な資料と言えよう。

Ⅱ期：古墳時代後期～平安時代後期

この時期の遺構は確認できなかったが、出土遺物に須恵器甕、土師器脚付皿・清郷型鍋、灰釉陶器椀（O-53号窯式期、百代寺窯式期）、緑釉陶器、製塩土器がある。出土量は少ない。

製塩土器は三河湾島嶼部の篠島式Ⅵ類の類似品、及び知多式3・4類に相当する製品で、近隣の惣作遺跡で同型式・類似品が出土している。煮炊具の清郷型鍋はこの地で人々が生活したことを裏付ける遺物と言えよう。

石丸遺跡は標高10～13mの台地縁辺部に位置しており、旧衣ヶ浦湾沿岸部（標高約2m）と8m以上の比高差があるため、石丸遺跡の地で直接土器製塩を行ったとは考えにくく、製塩土器は近隣の製塩遺跡から持ち込まれた製品と考えられる。

旧衣ヶ浦湾西岸域の製塩土器出土遺跡は、石丸遺跡、惣作遺跡の他、知多式3類の製塩土器・緑釉陶器などが出土した棧敷貝塚（標高約10m）、知多式3・4類の製塩土器などが出土し、土器製塩に関わる人々の集落と想定される東浦町の天白遺跡（標高約10～20m）^(11・12)、知多式4類の製塩土器などが出土した豊明市大脇城遺跡（標高約3.5m）⁽¹³⁾

などがあるが、遺跡数は少ない⁽¹⁴⁾。

石丸遺跡は旧衣ヶ浦湾沿岸部と直線距離で約100mと近く、土器製塩の拠点の遺跡である惣作遺跡に近いこと、また、標高10m以上に位置しており、高潮や津波などの被害が少ないことなどから、土器製塩や漁業に関わる人々の集落が展開していたのではないかと推察される。なお、当時の威信財である緑釉陶器が出土しており、今後の周辺の調査で有力者に関わる掘立柱建物等が発見される可能性も考えられよう。

Ⅲ期：平安時代末期～鎌倉時代

時期の判明する遺構は、溝SD024、土坑SK013、柱穴SP0615・0666・0673・0674・0715・0824・0825のみで極めて少ない。時期不明の柱穴が無数に存在するため、未復元の掘立柱建物が存在する可能性もあるが、続くⅣ・Ⅴ期の遺構にこの時期の遺物が多く含まれているため、Ⅳ・Ⅴ期の開発で破壊され遺存していないだけの可能性もある。

溝SD024で内面に漆が付着した山茶碗が出土しており、集落内で漆が使用されたと考えられる。

出土遺物には土師器皿・伊勢型鍋、初期山茶碗第3・4型式の山茶碗・片口鉢Ⅰ類・小型壺・突帯文四耳壺、尾張型山茶碗第5～8型式期の山茶碗・小碗・小皿・片口鉢Ⅰ類・陶丸・融着した山茶碗、加工円盤、常滑窯産陶器の甕・広口壺・羽釜、中国産青磁・白磁碗、中世瓦などがある。

市域では山茶碗生産の最盛期にあたり、非常に多くの山茶碗類が出土した。このうち、融着した山茶碗・小碗は22点出土しており、そのうちの1点で使用痕が認められた。石丸遺跡の半径600m圏内には、北に山之神社北古窯、南西に平子・平子B古窯などの山茶碗窯が分布しており（第3図）、廃棄品などを入手し易い環境にあったことが伺える。石丸遺跡は、旧街道や旧衣ヶ浦湾に面した海上交通の要衝に位置しており、山茶碗生産や流通に関わる集落であった可能性も考えられる。

特筆すべき遺物に、刻画文が施された突帯文四耳壺片がある。刻画文壺は当時の特権階級による特注品であり、全国的に見ても出土例が少なく注目すべき遺物と言える。この他、時期はやや下がるが、中国産青磁・白磁碗などの威信財も出土しており、

前代に引き続き有力者の存在を裏付ける遺物と言えよう。

他に注目すべき遺物として中世瓦がある。市域の瓦陶兼業窯には、京都・鳥羽離宮東殿所用瓦と山茶碗を併焼した吉田第1・2号窯が知られている他、瓦が採集された窯跡が数基あるが⁽¹⁵⁾、現在までのところ、石丸遺跡周辺で瓦陶兼業窯は確認されていない。今回出土した中世瓦は未知の窯跡から持ち込まれた製品の可能性もあるが、遺跡の南に平安時代初頭の十一面観音菩薩像を本尊とした普門寺（中世遺物散布地）が位置しており、今後の周辺の調査で、小規模な瓦葺建物（仏堂的建物）などが発見される可能性も十分考えられる。

IV期：南北朝～室町時代前半（第49図）

IV期になるとやや歪な溝で区画された屋敷地が出現する。調査区西側に屋敷地A、東側の一段低い場所に屋敷地Bが開発される。屋敷地A・Bの間には並行する2本の溝に挟まれた道路状遺構SX012が南北に延びる。時期の判明する主要な遺構には、掘立柱建物2棟、区画溝5条、素掘り式井戸2基、竪穴状土坑6基、土坑8基、溝3条、堀1条、柱穴3基、道路状遺構が1条ある。

出土遺物には、土師器皿・羽釜、尾張型山茶碗第9型式期の山茶碗・小皿、東濃型山茶碗大洞東期の山茶碗、同大畑大洞新段階の小皿、古瀬戸中期の水注・瓶子・花瓶・片柄片口、古瀬戸後I期～後III期の天目茶碗・平碗・縁釉小皿・折縁深皿・盤類・播鉢・播鉢形小鉢・折縁中皿・折縁深皿・直縁大皿・燭台・鍋、瓦質土器の火鉢・風炉、花押が書かれた墨書土器、常滑窯産陶器の甕・玉縁壺・片口鉢Ⅱ類、加工円盤、石硯、砥石、鉄滓、鉄釘、炉壁、木製品などがある。

屋敷地A 東西32m以上、南北21m以上（推定25m）の東西に長い屋敷地である。屋敷地北側に区画溝が途切れる箇所がみられ、出入口の可能性もある。屋敷地Aでは、掘立柱建物SB03、区画溝SD017・025・066、井戸SE001、竪穴状土坑SK037・043・061・018、土坑SK001・028・017・035、溝SD005・060を確認した。

屋敷地北西の掘立柱建物SB03は、南北1間×東西3間以上の側柱建物で、建物南側に井戸SE001、

竪穴状土坑SK037・043・061が分布する。竪穴状土坑SK043では食物残滓を捨てた貝層を検出しており、SB03に伴う貝層と考えられる。SK043・061はSB03の建物主軸方位に揃わないが、南側丘陵部の傾斜変換点に位置するため、地形に制約を受けたためと思われる。

竪穴状遺構SK037からは花押が書かれた墨書土器や石硯などが出土した他、SK037に隣接した柱穴SP0137からは炉壁、区画溝SD017からは鉄滓が出土しており、付近に鍛冶関連施設や工房等が展開していた可能性が高い。

屋敷地東側には竪穴状土坑SK018、土坑SK017・035が散在する。屋敷地東側は柱穴がほとんどみられず遺構密度も希薄なことから、畑などの耕作地や庭などに利用された可能性がある。屋敷地南側は近世以降の削平により浅い遺構は破壊されたと思われるが、柱穴も確認できないため、当初から掘立柱建物は存在しなかったとみられる。

屋敷地B 東西27m以上（推定30m）、南北28m以上（推定30m）のやや歪な方形の屋敷地である。屋敷地Aに比べて遺構密度が高く、柱穴も多くみられる。区画溝SD079の北端とSD119西端との間に空地がみられ、屋敷地の出入口の可能性が高い。ここでは掘立柱建物SB10、井戸SE003、堀SD126、区画溝SD079・119、竪穴状土坑SK115・140、土坑SK152・155・162・166、柱穴SPO687・0949・0957を確認した。

屋敷地南東の掘立柱建物SB10は2間×2間の側柱建物で、平面規模は総柱建物SB09に近似する。掘形規模が大きく掘削深度も深いことから、倉庫状の建物になると考えられる。なお、屋敷地南半部を中心にこの時期の柱穴が多く分布しているため、未復元の掘立柱建物が存在する可能性が高い。

SB10の東側には竪穴状土坑SK115・140があり、他の土坑は屋敷地中央から南半部にかけて分布する。SK140からは炉壁・焼土・炭化物が多く出土しており鍛冶関連遺構の可能性が高いが、周辺で鉄滓は出土していない。屋敷地南東の堀SD126は検出範囲が限られており、現段階でどのような性格の堀になるのか不明である。井戸は屋敷地北東部で1基確認した。

ここで、石丸遺跡が位置する横根に関連した史料をみていきたい(表7)。横根郷は南北朝から戦国期にみられる郷名で、建武4年(1337)の「足利尊氏袖判下文写」に、軍功により本多助定⁽¹⁶⁾に尾張国横瀬郷(=横根)を与える(『土佐国蠹簡集残篇』)としたのが初見である。その後は、応永16年(1409)の「熊野参詣良尊法印引導之檀那之在所事」に「智多郡横根郷」の記載があり(『米良文書』)、また、市内延命寺所蔵の『紙本墨書大般若経』に、「尾州智多郡横根郷於藤井大明神御宝前蒙十方檀那資助頭大般若経一部」とあり、文安2年(1445)に横根郷の藤井大明神に大般若経600巻を奉納すべく勧進を行い、宝徳四年(1452)に奉納した旨が記されている。

中世横根郷の範囲については明確でないが、概ね近世横根村(現横根町)と同北尾村(現北崎町)を含む旧衣ヶ浦湾東岸一帯と想定される。今回検出された石丸遺跡の中世集落は、上記文献史料にみる中世横根郷の集落の一部とみられ、文献史料に記載された集落が実際に遺構として発見された貴重な例と言えよう。この時期、横根郷を含む知多半島東北部は熱田社領(南北朝以後、北部は国衙領)英比荘にあたり、南は半田市岩滑、北は豊明市大脇に至るまで広大な荘域であったとされ⁽¹⁷⁾、中世横根郷は英比荘内の集落の一つであったと考えられる。

検出された遺構群は、一般的規模の屋敷地と建物であり、集落の中心的施設と呼べる規模・格式の建物は検出されなかったが、出土遺物に古瀬戸の水注・瓶子・燭台・天目茶碗、瓦質土器の火鉢・風炉など、一般的な集落では出土しない威信財が多く含まれており、さらには花押を記した墨書土器が2点みられることは、集落内に地頭クラスの人物の屋敷地が存在した可能性を示唆している。今後の周辺の調査で集落の中心的な屋敷地や掘立柱建物などが検出される可能性が高いと言えよう。

V期：室町時代後半・戦国時代(第50図)

遺構・遺物ともに最も多く、石丸遺跡の最盛期と考えられる時期である。時期の判明する主要遺構には、掘立柱建物8棟、掘立柱柵列3条、区画溝5条、堀1条、小区画溝2条、素掘り式の井戸

2基、竪穴状土坑5基、土坑17基、水溜状遺構2基、道路状遺構が1条ある。

各屋敷地の区画溝は、再掘削されつつ概ね16世紀前葉頃まで維持されたと考えられる。15世紀末から16世紀前葉にかけては、調査地北東部に新たに屋敷地Cが開発され、16世紀前葉から中葉にかけて遺構数が増加する。屋敷地Aの北側にも別の区画に遺構がみられるため、調査地北側にも別の屋敷地が展開していた可能性が高い。16世紀前葉頃には屋敷地Bの北側に防禦性の高い堀SD120が掘削され、屋敷地の構造が大きく変化したとみられる。なお、建物方位に屋敷地を超えた規制はみられず、概ね各屋敷地の地形に制限されたと考えられる。

出土遺物には、土師器皿・羽釜・内耳鍋・「く」字形内耳鍋、古瀬戸後Ⅳ期の平碗・天目茶碗・緑釉小皿・折縁深皿・直縁大皿・根来形瓶子・丸皿・卸皿・小皿・盤類・播鉢・仏供・燭台、古瀬戸後期末～大窯第1段階の桶、大窯第1段階から第4段階にかけての播鉢・稜皿・丸皿、常滑窯産陶器の甕・片口鉢Ⅱ類、瓦質土器の火鉢・鍋、墨書土器(「上」字)、砥石、炉壁、鉄釘、鉄滓などがある。

屋敷地A 掘立柱建物SB01・02・04、掘立柱柵列SA02・03、井戸SE002、小区画溝SD011・012、土坑SK011・027を確認した。

掘立柱建物は前代に続いて屋敷地の北西に営まれる。掘立柱建物SB01は南北5間×東西1間の長大な側柱建物で、掘形規模が大きく掘削深度も深いことから、居住性を重視した建物ではなく倉庫や工房などの特別な施設になる可能性が高い。

SB01の西側に位置する掘立柱建物SB04は東西2間以上×南北1間の側柱建物で、SB01と建物主軸方位が一致することから、SB01に併存した建物の可能性が高い。掘立柱建物SB02はSB01建替え後の南北4間×東西2間の側柱建物で、一部の柱穴に根石を伴う。これも掘形規模が大きく、掘削深度も深い、構造的には住居の可能性が高いと思われる。井戸SE002はSB01・02の西側に位置しており、時期的にSB01・02・04のいずれかの建物に伴う井戸と考えられる。

掘立柱柵列SA02・03のうち、SA03はSB01・04に、SA02はSB02にそれぞれ建物主軸方位が

一致しており、掘立柱建物の建替えに伴い柵列も造り替えられたと考えられる。溝 SD011・012 は SB01・02 の雨落溝もしくは排水溝と思われる。SD011 の東側は遺構密度が希薄で、16 世紀代に新たに土坑 SK011・027 が掘削されるものの、墓や火葬施設もみられないことから、前代同様、耕作地や庭などに利用された可能性が高い。

屋敷地 B 掘立柱建物 SB05～07・09、掘立柱柵列 SA01、井戸 SEO03、竪穴状土坑 SK050・052・154、土坑 SK053・095・114・117・121・153 などを確認した。

屋敷地南東の掘立柱建物 SB05 は、南北 3 間×東西 1 間の大型の側柱建物で、掘形規模が大きく掘削深度も深いことから、倉庫や工房等の特別な施設になる可能性が高い。SB05 西側の建物 SB09 は 2 間×2 間の総柱建物で倉庫状の建物と考えられる。SB05・09 と建物方位がほぼ一致する SA01 もこれらの建物と同時期の掘立柱柵列であろう。

屋敷地西端と南端には竪穴状土坑 SK050・052・154、中央部に土坑 SK053・095・114・117・121・153 などが分布する。このうち、SK154 では砥石、SK153 では灰釉燭台、SK114 では瓦質土器の火鉢などが出土した。

15 世紀末から 16 世紀前葉には、屋敷地北側に掘立柱建物 SB06・07 が建てられる。SB07 と SD079 は一部重複する箇所がみられるが、SB07 が後出するため、SB07 構築時に区画溝の一部はすでに埋没した状態だったと考えられる。SB06 は東西 4 間×南北 1 間あるいは 2 間の側柱建物、SB07 は東西 2 間×南北 2 間あるいは 3 間の側柱建物と思われる。

16 世紀前葉には屋敷地北側に新たに幅 2.4～3.3 m、深さ 1.1 m の大規模な堀 SD120 が掘削される。検出した堀は SD120 のみで、調査後実施した確認調査で土坑 SK092 の北側に堀状遺構は検出されなかったため、調査地北側に SD120 と同様の堀が存在していた可能性は低いと言える。また、屋敷地東側は比高差 2 m 以上の段丘崖が南北に延びて要害性に優れているため、堀が巡っていたかどうか疑問である。屋敷地南縁は幕末頃の大規模な切通し SX013 がみられ、中世の遺構は残存していなかつ

たが、堀 SD120 と切通しは主軸方位がほぼ一致しており、切通し開削以前に区画溝や堀が存在していた可能性も十分考えられる。堀が埋没する前に古道に再利用されたとすれば、中世の堆積層が一切みられない理由としては納得がいく。なお、土塁や土橋は検出されなかった。

屋敷地 C 東西 22 m 以上、南北 17 m 以上の屋敷地で、掘立柱建物 SB08、竪穴状土坑 SK063・064、水溜状遺構 SK083、土坑 SK066・069・076・078・079・090・091 を確認した。

屋敷地南側の掘立柱建物 SB08 は、東西 4 間×南北 1 間の側柱建物で、一般的な規模の掘立柱建物である。屋敷地北側の竪穴状土坑 SK063・064、焼土・炭化物を多量に含む水溜状土坑 SK083 などは、工房的性格の強い遺構群と思われる。屋敷地 C で鉄滓等は出土していないが、屋敷地 C に近接した土坑 SK092 で鉄滓・鉄釘・砥石が出土しており、付近に鍛冶関連施設が存在していた可能性が高い。

いずれの屋敷地でも集落の中心的施設と呼べる規模や格式の掘立柱建物は確認できず、倉庫またはこれに類する掘立柱建物が多く分布するのが特徴的と言える。また、鍛冶関連遺物や粘土貼り土坑、竪穴状土坑等も見られることから、鍛冶関連施設や工房等も多く存在していたと考えられる。

特筆すべき遺物として、古瀬戸の鉄釉根来形瓶子、鉄釉燭台、天目茶碗などの威信財があり、前代に引き続き、有力者の存在を裏付ける遺物と言えよう。

15 世紀末になると、14 世紀後半に滅亡した小河氏の末裔とされる戦国大名水野氏が旧地の小河（東浦町緒川）を取り戻し、文明年間（1475～1487）に緒川城を築城して隣国の刈谷や横根・大府などを治めた⁽¹⁸⁾。戦国期の知多半島北部は、半島北部と三河西部を領有する水野氏、尾張の織田氏、三河の今川氏、松平氏らの戦国大名が、尾三国境各地の城や砦を巡って幾度も攻防が繰り返された地域である。永禄元年から同 4 年（1558～1561）の石ヶ瀬の戦いでは、市域南部の石ヶ瀬川（市域南部と東浦町境付近）を挟んで、織田信長と今川義元、また、織田氏と連合する水野信元と松平元康らが複数回にわたって衝突し、横根でも合戦が行われ

たという⁽¹⁹⁾。

16世紀前葉から中頃にかけては、堀SD120が掘削された時期に相当し、石丸遺跡は旧街道に面した交通の要衝に立地した重要な拠点として、防禦性の高い堀の掘削が急務であったと推察される。なお、先述のように、旧街道沿いに面した東側は高さ2m以上の段丘崖で要害性に優れているため、堀は存在しなかった可能性があるが、屋敷地南側の切通し部には堀が存在した可能性は十分考えられる。今回の調査地に比べて調査地南側の普門寺裏山付近が周囲で最も標高が高く、旧街道沿いにも面していることから、砦などを築くには相応しい場所と思われる、また、切通し以南は城跡の曲輪を想起させる「石丸」の字名も残ることから(第3図)、切通し部は南側丘陵地の防禦を意識した堀であった可能性も考えられ、今後は周辺の地形的特徴を踏まえつつ、より広範囲に遺構の分析を行っていく必要がある。

VI期：江戸時代(第51図)

江戸時代の遺構には、溝SD002・008・009・068・084・085・090・101・121、埋喪遺構SK094、土坑SK073、小溝状遺構群(SD029・074～078・091・092・094～100等)、切通しSX013などがある。出土遺物には灯明皿(土師器皿)、瀬戸・美濃窯産陶器の片口・播鉢、常滑産陶器の赤物甕・長火鉢、肥前系陶磁器、窯道具などがあるが、出土量は非常に少ない。

遅くとも17世紀初頭には各屋敷地の区画溝や堀は完全に埋没したとみられ、調査区全域を通して建物や土坑などの遺構はほぼ見られなくなる。溝SD008・068・084・090・121は調査前の畑地の耕地段差に重複した位置に掘られおり、耕作関連の排水溝と考えられる。これらの溝に平行もしくは直交方向の小溝状遺構群は、畑もしくは水田耕作に伴う耕作痕と考えられる。埋喪遺構SK094は田畑の脇に設置された、いわゆる野甕(野壺)であろう。浅い土坑SK073も耕作関連の遺構と思われる。

調査区南縁の切通しSX013は、「知多郡北尾村絵図」(第52図)が描かれた天保年間には存在したとみられ、古道として利用されてきたことが伝えられており、現在は横根町と北崎町の町境とさ

れている。

以上の遺構分布や出土遺物量からみて、17世紀以降は調査区全域で耕地化が進み、生産域の拡大に伴い、居住域も調査地の北側あるいは東側に移動したと考えられる。調査地北側に北屋敷、東側に南屋敷などの字名が残るが(旧街道を基準とした方位の字名)、この時期の居住域の移動・集住に伴い付けられた字名かもしれない(第3図)。

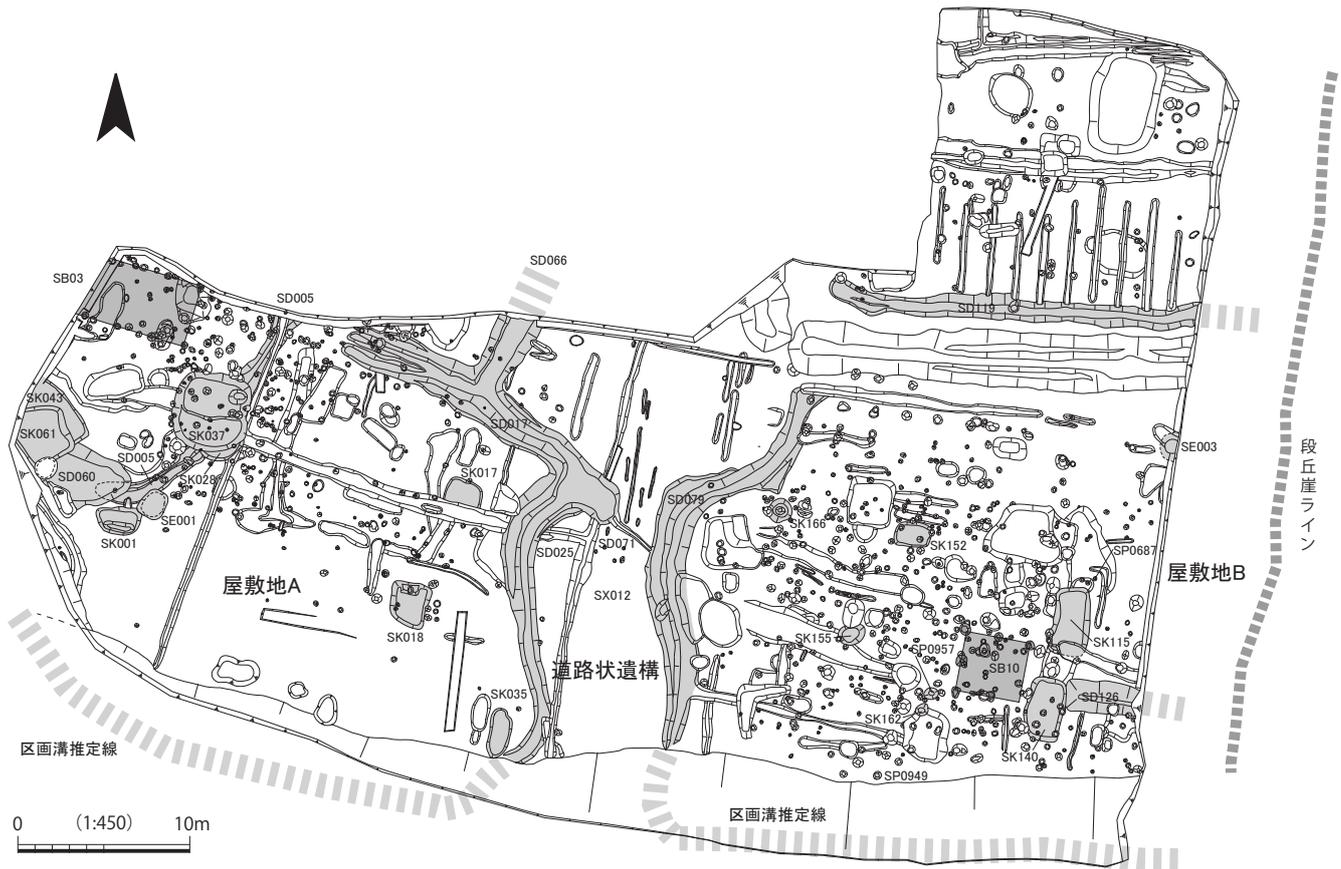
なお周辺では、やや時期が遡るが、永禄7年(1564)に調査地北側の賢聖院が創建され、元和年間(1615～1624)には調査地南側の普門寺や極楽寺が再興・創建されるなど、調査地周辺の寺院の造営・再興が積極的に進められた。その後は、調査地東側の東浦街道沿いに天王社と北尾秋葉社が祀られ、「寛政五年」(1793)と「天保九年」(1838)銘の常夜燈が見られることから、街道周辺の整備も進められたと考えられる。

以上のように、石丸遺跡は、古くは縄文・弥生時代にまで溯り、続く古墳時代後期から江戸時代に至るまでは、ほぼ途切れることなく連綿と集落が営まれてきた貴重な遺跡と言える。

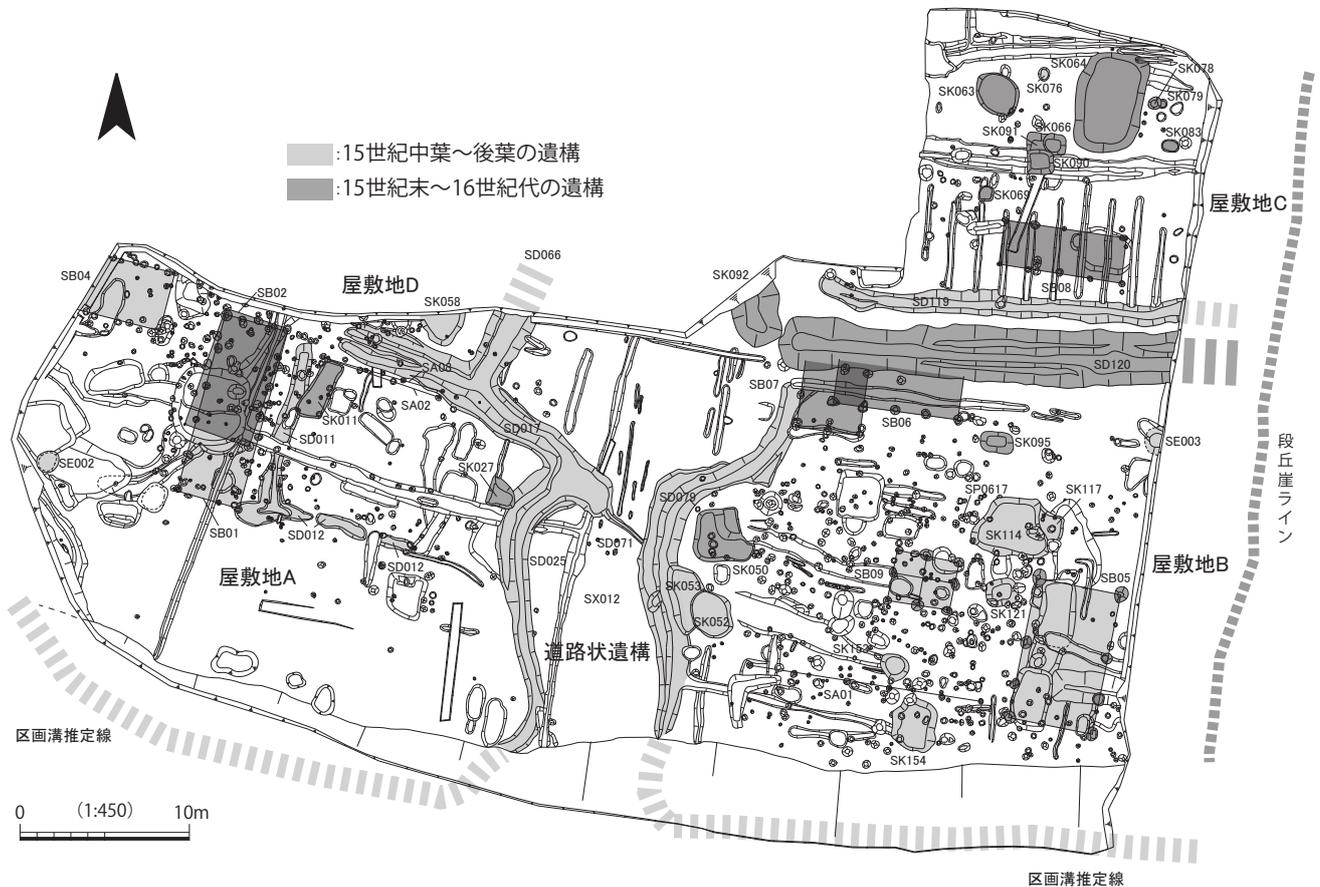
今回の調査で特筆すべきは、文献史料に記載された中世英比荘横根郷の集落の一部が検出されたことで、知多半島域では数少ない中世集落遺跡の調査として貴重な成果を得ることができた。今後は知多半島及び旧衣ヶ浦湾周辺の中世集落遺跡と集落構造や出土遺物などの比較検討が進展し、この地の歴史がより具体的に復元されていくことを期待したい。

【註】

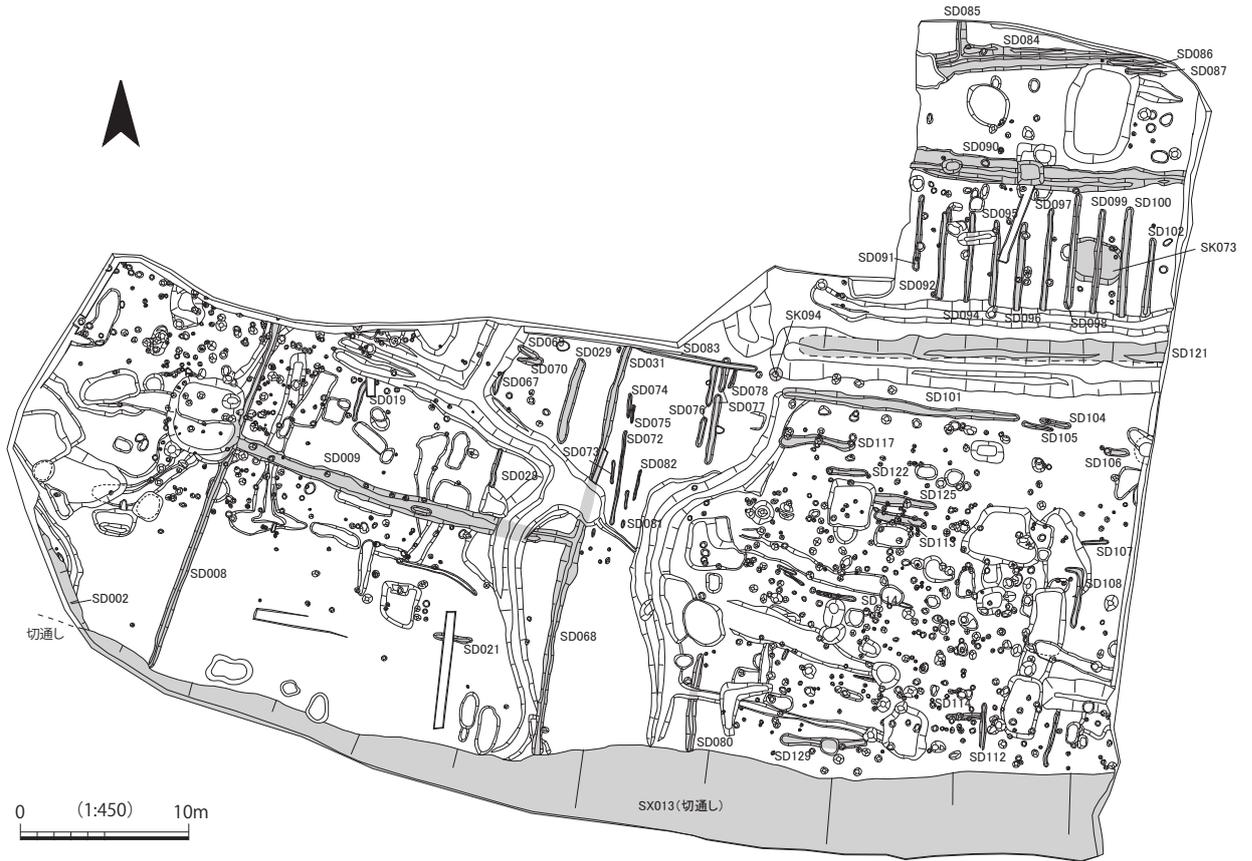
- (1) 大府市 1991『大府市誌 資料編 考古』愛知県大府市
- (2) 後藤太一編 2020『棧敷貝塚』大府市教育委員会・ナカシャクリエイティブ株式会社
- (3) (1)
- (4) 時期はやや下るが、豊田市今町遺跡では、これとほぼ同規模の1間×5間の大型の掘立柱建物(江戸時代前期)が検出されており、倉庫状(蔵)の建物と想定されている。鈴木正貴・鬼頭剛ほか 2009「今町遺跡Ⅱ」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第162集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- (5) 貝層内出土貝殻の炭素14年代測定の結果、西暦1278.5-1304(77.5%)、西暦1387.5-1380(17.5%)の結果が得られており、14世紀前葉～中葉頃の土坑の年代観とも大きな矛盾はないものと考えられる。なお、年代測定は地権者でもある愛知工科大学名誉教授の相木国男氏が



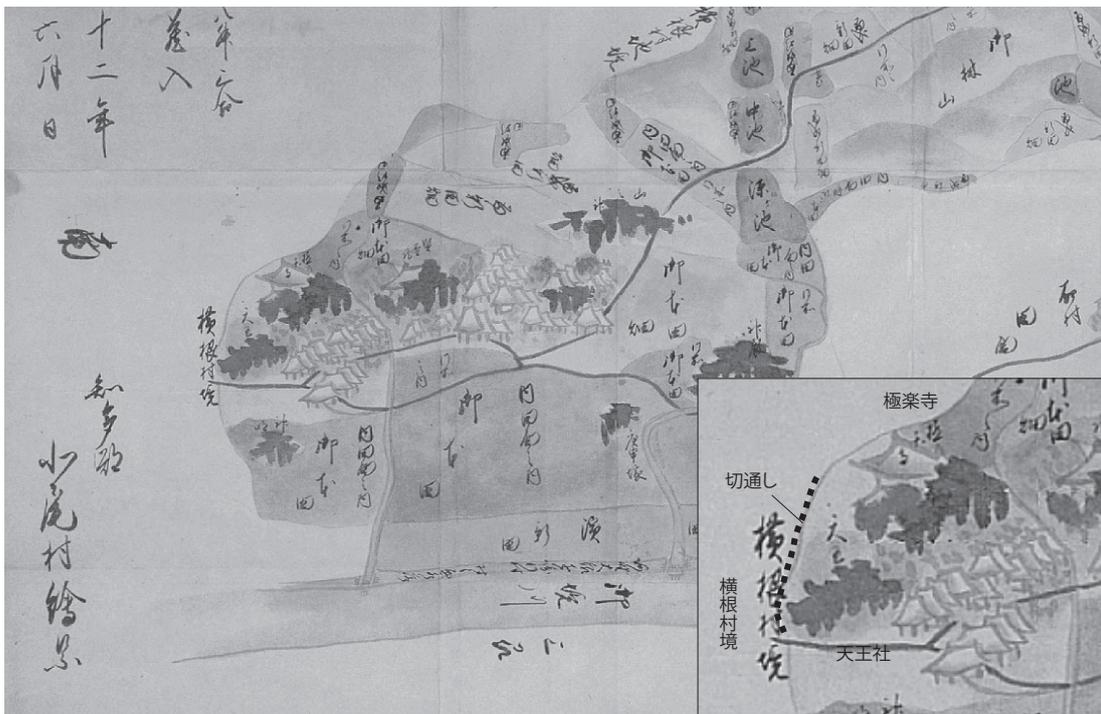
第49図 IV期：南北朝～室町時代前半（14世紀中葉～15世紀前葉）の遺構分布



第50図 V期：室町時代後半～戦国時代（15世紀中葉～16世紀代）の遺構分布



第51図 VI期：江戸時代（17世紀～19世紀代）の遺構分布



第52図 知多郡北尾村絵図 天保十二年（1841） 右下：現場周辺の拡大図

表7 横根に関する事項年表

時代	西暦	年号	横根周辺に関する事項	一般事項	
鎌倉時代	1180	治承 4		源頼朝 伊豆で挙兵	
	1191	建久 2	藤井神社(横根町)、源頼朝より勧請される(「社伝由緒書」) 大府丘陵で山茶碗窯が多く築かれる		
	1221	承久 3	このころ、「藤井宮御酒瓶子」銘短頸壺つくられる	承久の乱	
	1333	元弘 3		鎌倉幕府滅亡	
	1336	建武 3		室町幕府成立	
	南北朝時代	1337	建武 4	本多助定、軍功により足利尊氏より「横瀬郷」(＝横根)の領地権を与えられる『土佐国蠹簡集残篇』	
		1338	暦応 1		足利尊氏征夷大將軍
		1354	文和 3	延命寺大般若経第9巻写本記年号	
		1357	延文 2		鳴海庄が醍醐寺三宝院の知行となる(後光厳帝綸旨)
		1360	延文 5	小河正房、尾張守護代の土岐直氏に攻められ濁池城で討死(「太平記」)	
室町時代	1397	応永 4	吉川入道、吉川城を築く(「清凉寺旧記」)		
	1409	応永 16	横根郷が「熊野道者檀那職譲状」にみえる(「米良文書」)		
	1445 ～52	文安 2 宝徳 4	延命寺大般若経 600巻の勧進始まる 藤井大明神に奉納		
	1467	応仁 1		応仁の乱 (～1477)	
	1475	文明 7	水野貞守、緒川城を築き(文明年間)、付近の村を支配する		
	1477	文明 9	「大夫」(＝大府)、「横根郷」の名がみえる(「如光弟子帳」)		
	1498	明応 7	藤井大明神社頭を造立する 「奉造立藤井大明神社頭一字(表)大工熱田宮住仁左衛門大夫幸吉于時 明忘七机卯月日願主当所御代官富田左京亮家次」(延命寺棟札)		
	戦国時代	1509	永正 6	水野忠政、緒川城主となる	
		1531	享禄 4	延命寺へ慶済が比叡山より晋住し、中興開山となる	
		1554	天文 23	水野信元、松平氏の村木砦(東浦町)を攻める	
1558		永禄 1	石ヶ瀬川畔で水野信元と松平元康が戦う(「家忠日記増補」)		
1560		永禄 3		桶狭間の戦い	
1561		永禄 4	石ヶ瀬川畔で水野信元と松平元康が再び戦う(「家忠日記増補」)		
1563		永禄 6	三河一向一揆起こり、水野信元一族は家康に味方して戦う		
1564		永禄 7	賢聖院、開創される(北尾村)		
安土・桃山時代	1575	天正 3	水野信元、殺される	長篠の戦い	
	1582	天正 10	水野忠重、織田信雄より刈谷・緒河領のうち1万3000貫文与えられる(「織田信雄分限帳」)	本能寺の変	
	1584	天正 12		小牧・長久手の戦い	
	1600	慶長 5		関ヶ原の戦い	
江戸時代	1603	慶長 8		江戸幕府成立	
	1608	永禄 7	伊奈備前守ら尾州検地 横根村検地 10月10日～15日		
	1615 ～24	元和年間	普門寺、曹洞宗の寺として再興される(普門庵)	大阪夏の陣	
	1620	元和 6	善栄によって極楽寺創建される(伝)		

- 名古屋大学に依頼・実施されたもので、今回、分析結果のみ掲載させて頂いた。
- (6) 清水正明ほか 2015『新編知立市史』3 資料編 考古(原始・古代・中世) 知立市
 - (7) 中村毅編 2018『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
 - (8) 奥川弘成・立松 彰 1998『ウスガイト遺跡の記憶』武豊町教育委員会
 - (9) 9世紀中頃以降、新たな製塩技術として塩田法による大規模採塩技術と鉄鍋などの大型煎熬容器の導入により土器製塩が衰退し、三河湾の土器製塩関連遺跡は激減するが、惣作遺跡では土器製塩の衰退期にあっても、10世紀前半頃まで活発に土器製塩を行っており、惣作遺跡で出土した棒状土製品は、大型煎熬容器の支脚ではないかとの指摘もある。(愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』愛知県)
 - (10) 北村和宏・鬼頭剛・堀木真美子ほか 1999「大脇城遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 86 集』財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
 - (11) 楠美代子・富野顔・青木修・川添和暁・新美倫子・堀木真美子 2020「天白遺跡発掘調査報告書 2」『東浦町郷土資料館調査報告第 15 集』東浦町教育委員会
 - (12) 愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』愛知県
 - (13) (10)
 - (14) 一方、対岸の刈谷市・知立市域では、現矢作川河口部を含む旧衣ヶ浦湾東岸域の逢妻川沿岸、猿渡川沿岸、旧衣ヶ浦湾東岸旧西浦などの 5 水域で、40ヶ所以上もの製塩土器出土遺跡が確認されている。このうち刈谷市中条遺跡では、古代の掘立柱建物の他、円面硯・緑釉陶器・丸轆等の官人層の居住が伺われる遺構・遺物が出土している。中条遺跡や知立市西中神明社南遺跡は、猿渡川水域の入江最奥部の塩の集積場として、海浜部や河口部から集めた塩を東海道筋に供給する拠点であった可能性が指摘されている。
 - (15) 市内宮内町の大高山古窯、馬池町の馬池東古窯で瓦が採集されている。
 - (16) 「足利尊氏袖判下文」から、室町幕府奉公衆(幕府直属の武官)と考えられている。
 - (17) 13世紀中頃以降は東浦町小河を本拠とした小河氏が英比荘小河村の地頭職を代々努め、その管理地域は、南は生路(東浦町)、西は米田(大府市)、北は横根郷を含めた大脇(豊明市)まであったとされる。建武4年に管理地域の横根郷の領地権が小河氏から本多助定に渡ったことで、地頭的小河正房と本多氏の間で戦闘があったとされ、その後、小河正房と尾張・美濃守護土岐氏の対立が深まり、延文5年(1360)に土岐直氏の攻撃を受け、東浦町笠松の濁池城で一族共々滅亡している(「太平記」)。
 - (18) 永正6年(1509)年に父・水野清忠の跡を継いだ戦国大名水野忠政とその子信元は、緒川城・刈谷城を拠点として、横根・常滑・荒尾・西尾・奥田・細目・平尾城などの諸城と知多半島東海岸及び成岩から常滑間の海上交通路を押さえ、北は大高方面にも勢力を拡げていた。
 - (19) 「知多郡横根、永禄四年、從岡崎小川へ御働之時、小川勢出合いてせり合い、翌日岡崎勢、石ヶ瀬にて小川勢と又せり合う」とある(『武徳編年集成』)。

【引用・参考文献】

- ・加藤岩蔵 1972『惣作遺跡』大府市教育委員会
- ・大府市 1988『大府市誌 資料編 自然』愛知県大府市
- ・半田市誌編さん委員会 1989『新修半田市誌』本文編上・中巻 愛知県半田市
- ・大府市 1991『大府市誌 資料編 考古』愛知県大府市
- ・田中城久 2017「市内遺跡調査報告書」『大府市文化財調査報告書 12 集』大府市教育委員会
- ・西村匡広編 2018『上入道古窯』大府市教育委員会 株式会社アコード
- ・後藤太一編 2020『棧敷貝塚』大府市教育委員会・ナカシャクリエイト株式会社
- ・鈴木正貴・鬼頭剛ほか 2009「今町遺跡Ⅱ」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 162 集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター
- ・愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
- ・愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』愛知県
- ・愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』愛知県
- ・愛知県史編さん委員会編 2015『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』愛知県
- ・愛知県愛知県史編さん委員会編 2017『愛知県史 資料編 5 考古 5 鎌倉～江戸』愛知県
- ・鶴飼堅証・新美倫子・平井義敏他 2016『中条遺跡発掘調査報告書 1』刈谷市
- ・鶴飼堅証・岩月あすか・佐野郁乃他 2017『中条遺跡発掘調査報告書 2』刈谷市
- ・鶴飼堅証・河野あすか・佐野郁乃・平井義敏他 2018『中条遺跡発掘調査報告書 3』刈谷市
- ・鶴飼堅証・河野あすか・佐野郁乃・平井義敏他 2019『中条遺跡発掘調査報告書 4』刈谷市
- ・樋上 昇・鈴木正貴他 2013「下津宿遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- ・岡本茂史 1994『腰前遺跡発掘調査概報』知立市教育委員会
- ・山本ひろみ編 1995『腰前遺跡発掘調査概報』知立市教育委員会
- ・大野真規編 1996『小針遺跡発掘調査報告書』知立市教育委員会
- ・大野真規編 1997『小針遺跡Ⅱ』知立市教育委員会
- ・奥川弘成・立松 彰 1998『ウスガイト遺跡の記憶』武豊町教育委員会
- ・中村毅編 2018『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- ・清水正明ほか 2015『新編知立市史』3 資料編 考古(原始・古代・中世) 知立市
- ・楠美代子・富野顔・青木修・川添和暁・新美倫子・堀木真美子 2020「天白遺跡発掘調査報告書 2」『東浦町郷土資料館調査報告第 15 集』東浦町教育委員会
- ・北村和宏・鬼頭剛・堀木真美子ほか 1999「大脇城遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 86 集』財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

付論 土坑 SK092 出土遺物について

青木 修（瀬戸市文化振興財団
埋蔵文化財センター）

本項では、土坑 SK092 の出土遺物、特に陶器類に関わる器種組成について数量的に分析を試み、消費状況の変遷の解明を主たる目的として示すものである。つまり、限定的な遺構としての位置付けを決定するものではないが、遺跡全体を俯瞰した場合の存続期間として参考となり得る所見を導き出すことができると期待したい。なお、遺構の詳細と遺物の形態的特徴は、前章までに紹介されているためこれを参照されたい。

SK092 出土遺物は、愛知県の窯業地である猿投窯、常滑窯、瀬戸窯に代表される陶器類が大半を占める中、他に土師器類、土製品、石製品、鉄製品などが確認されている。土師器類は、古代の清郷型と呼ばれる鍋と 16 世紀中頃の羽釜類であり、土製品は古代の支脚、石製品と鉄製品は中近世と思われる砥石と鉄釘があり、他に鉄滓がある点は遺跡全体の評価につながる事例と推測される。

さて、本稿の目的に沿って土師器類を含めた陶器類を中心に分析すれば、古代末期灰釉陶器をはじめとして 16 世紀中頃に帰属する土師器類に至るまで様々な器種組成を示しており、窯業地別の生産内容の変遷も特徴的に捉えることができる。分析の対象とした各時期に帰属する陶器類の出土点数については、別表（表 1～3）に示してあるため、これを基準として記述する。

まず、古代末期灰釉陶器は、猿投窯の椀類が 3 点出土しており、いずれも 11 世紀代の百代寺様式に相当する特徴がある。引き続き、12 世紀代の状況は、猿投窯と常滑窯の山茶碗類が多く、全体のほぼ半数はこれらで占められている。12 世紀前半は、猿投窯の初期山茶碗類に限られるが、12 世紀後半に至り両者が混在する傾向となる。数量では、常滑窯製品が多く認められ、特に 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけて大きく増加する傾向にあるが、13 世紀前半には再び減少に転じ、13 世紀後半以降は皆無となるのに対し、13 世紀中頃には瀬戸窯の山茶碗（1 点）が認められる。なお、遺跡全体として

は、14 世紀代の瀬戸窯及び東濃窯の山茶碗も出土している。

片口鉢Ⅰ類は、猿投窯・常滑窯ともに 12 世紀中頃に登場し、転じて 12 世紀末から 13 世紀前葉頃までは、山茶碗と同様に常滑窯製品が圧倒的に多くを占め、13 世紀後半以降は皆無となる。また、12 世紀前半から 12 世紀中頃までは、山茶碗焼成窯の焼成器種である猿投窯の広口瓶と小型壺、常滑窯の三筋壺なども散見できる。

次に、常滑窯の壺・甕焼成窯に伴う器種として、広口壺・甕と片口鉢Ⅱ類に代表され、他に羽釜が認められる。帰属時期は、12 世紀中頃から 15 世紀後半までに相当するが、数量では 13 世紀後半代と 15 世紀代が多く、14 世紀代は比較的少ない傾向にあるが、遺構外では 16 世紀代の甕（第 40 図 139）が出土しているため、壺・甕の消費は本遺跡の稼働期間を通して普遍的に認められることになる。

12 世紀代の壺・甕は、その出現期に相当する常滑窯編年 1b 型式期の甕があり、消費地での報告が少ない点からも、注目すべき所見のひとつとなり得るであろう。羽釜は、12 世紀後半代に帰属し、旧尾張国から旧三河国北西部周辺に所在する集落遺跡を中心として、東海圏の中世遺跡などからの出土が数多く報告される資料である。

片口鉢Ⅱ類は、13 世紀前半に壺・甕の生産技法により誕生した器種であり、本遺構では 13 世紀後半以降に登場し、15 世紀前半代までの資料が確認できるものの、16 世紀代の資料は皆無であった。常滑窯における片口鉢Ⅰ類と片口鉢Ⅱ類に注目すれば、12 世紀中頃から 13 世紀前半までは、山茶碗焼成窯の片口鉢Ⅰ類、13 世紀後半以降は、壺・甕焼成窯の片口鉢Ⅱ類が積極的に生産され、合わせて消費も増加する傾向にある。また、13 世紀後半以降、猿投窯や常滑窯における山茶碗焼成窯が衰退する中、瀬戸窯では片口鉢Ⅰ類を含む山茶碗類の生産が大きく増加することになっているが、本遺構からは瀬戸窯の山茶碗類に該当する資料はほとんど確認できなかった点も特徴として捉えることができる。

古瀬戸製品は、使用期間が比較的長いと考えられる古瀬戸中期の水注を除けば、平碗、搦鉢、直縁

大皿、盤類、鍋、仏供などがあり、いずれも古瀬戸後期に限定され、特に古瀬戸後期後半のものが多く認められる。一方、大窯製品は、稜皿と播鉢のみで、いずれも大窯前半段階までに収まる。なお、本遺構に限れば天目茶碗は皆無であった。

以上、出土状況及び出土遺物の所見からは、16世紀後半以降の比較的早い段階に一括廃棄された可能性が高いと考えられるが、廃棄された陶器類の生産地年代には500年ほどの時間幅が存在する

ことになるため、消費傾向のみで画期を設定することは難しいのが現状である。ただ、瀬戸窯製品の動向から考えれば、15世紀から16世紀中頃にかけて、古瀬戸製品と大窯製品の消費が顕著に認められる点は、非常に興味深く、遺跡の性格や稼働期間を考察する上で参考となる所見に繋がる可能性が考えられる。

表1 SK092：山茶碗類出土点数表

器種	産地	百代寺	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	合計
山茶碗	猿投	3	4	2	3			12
	常滑			8	63	15		86
	瀬戸						1	1
片口鉢Ⅰ	猿投			1	1			2
	常滑			2	11	6		19
広口瓶	猿投		1	1				2
三筋壺	常滑			2				2

表2 SK092：壺・甕類出土点数表

器種	12世紀		13世紀		14世紀		15世紀		合計
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
広口壺・甕	1	1	1	8			1	2	17
	1					2			
片口鉢Ⅱ				2	1	1	2		9
			1			1			
				1					
羽釜		1							1

表3 SK092：古瀬戸・大窯製品出土点数表

器種	中期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	後Ⅳ期	大窯1	大窯2	合計
水注	1						1
平碗				1			1
縁釉小皿				1			1
稜皿						1	1
播鉢				2	1		3
直縁大皿				1			1
盤類		1					1
鍋			1				1
仏供				1			1

表8 出土遺物一覧表①

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)			残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径	器高				
1	灰軸陶器	椀	体部下半～底部	—	—	(10.6)	(2.2)	15	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台	7.5Y8/1灰白		
2	灰軸陶器	椀	体部下半～底部	—	—	(7.6)	(2.6)	30	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台	5Y7/1灰白		
3	灰軸陶器	椀	体部下半～底部	—	—	(7.4)	(2.7)	20	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台	5Y7/1灰白		
4	山茶碗	片口鉢I類	体部下半～底部	—	—	(11.6)	(2.9)	10	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台	2.5Y8/2灰白		
5	緑軸陶器	蓋小	—	—	残存長(5.2)	幅(4.0)	厚さ1.0	5	内面：ロクロナデ、緑軸施釉 外面：ロクロナデ、緑軸施釉	素地：10YR7/2にぶい黄橙 釉：濃緑色		
6	土師器	皿	口縁部～底部	—	(13.0)	(8.8)	2.2	50	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	10YR8/3浅黄橙	ロクロ成形土師器皿	
7	土師器	皿	口縁部～底部	—	9.6	不整形	1.5	50	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	7.5YR8/3浅黄橙	手づくね成形土師器皿	
8	土師器	皿	口縁部～底部	—	7.2	3.1	1.8	90	内面：摩滅のため不明 外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	7.5YR8/1灰白	手づくね成形土師器皿	
9	土師器	皿	口縁部～底部	—	6.3	不整形	1.5	90	内面：摩滅のため不明 外面：ユビオサエ	7.5YR8/3浅黄橙	手づくね成形土師器皿	
10	土師器	皿	口縁部～底部	—	—	—	(1.7)	40	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	7.5YR7/4にぶい黄橙	口縁部にスス(灯明皿)、手づくね成形土師器皿	
11	土師器	皿	口縁部～底部	—	(12.3)	6.6	3.2	80	内面：ロクロナデ 外面：回転糸切痕	7.5YR8/1灰白	ロクロ成形土師器皿、白色土器	
12	土師器	皿	口縁部～底部	—	8.9	不整形	1.7	90	内面：摩滅のため不明 外面：ユビオサエ	7.5YR8/2灰白	手づくね成形土師器皿	
13	土師器	皿	口縁部～底部	—	(9.8)	(5.4)	1.2	40	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	7.5YR7/6橙	手づくね成形土師器皿	
14	土師器	皿	口縁部～底部	—	7.1	4.6	1.3	60	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	7.5YR7/6橙	ロクロ成形土師器皿	
15	土師器	皿	口縁部～底部	—	(12.1)	(7.0)	2.8	60	内面：摩滅のため不明 外面：回転糸切痕、摩滅のため不明	10YR8/3浅黄橙	ロクロ成形土師器皿	
16	土師器	皿	口縁部～底部	—	8.4	5.4	1.6	90	内面：ロクロナデ 外面：回転糸切痕、ロクロナデ	7.5Y7/4にぶい黄橙	ロクロ成形土師器皿	
17	土師器	皿	口縁部～底部	—	(8.6)	(2.8)	2.0	60	内面：ナデ 外面：ユビオサエ、ナデ	10YR8/2灰白	手づくね成形土師器皿	
18	土師器	皿	口縁部～底部	—	(7.5)	5.3	1.8	80	内面：摩滅のため不明 外面：回転糸切痕、ロクロナデ	7.5Y7/4にぶい黄橙	ロクロ成形土師器皿	
19	土師器	皿	口縁部～底部	—	(13.2)	(9.6)	2.0	60	内面：ロクロナデ 外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	内面：7.5YR7/3にぶい黄橙 外面：5YR6/6橙	ロクロ成形土師器皿	
20	土師器	皿	口縁部～底部	—	(7.7)	4.9	1.5	60	内面：ロクロナデ 外面：回転糸切痕、ロクロナデ	7.5YR7/3にぶい黄橙～7.5YR8/1灰白	ロクロ成形土師器皿	
21	土師器	皿	口縁部～底部	—	5.2	1.7	1.3	90	内面：摩滅のため不明 外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	10YR7/3にぶい浅黄橙	手づくね成形土師器皿	
22	土師器	皿	口縁部～底部	—	4.6	1.6	1.5	80	内面：ユビオサエ 外面：ユビオサエ	10YR6/3にぶい黄橙	手づくね成形土師器皿	
23	土師器	皿	口縁部～底部	—	(7.2)	4.2	1.7	60	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	7.5YR7/6橙	口縁部にスス(灯明皿)、ロクロ成形土師器皿	

表8 出土遺物一覧表②

No.	種別	器種	部位	出土地点			法量(cm)			残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	口径	底径	器高				
24	土師器	脚付皿	体部下半～底部	SK154	-	(5.4)	(3.3)	50	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	10YR8/1灰白			
25	土師器	清郷型鍋	口縁部～体部上半	SK092	-	-	(5.8)	10	内面：ナデ 外面：板ナデ、ナデ	7.5YR8/2灰白			
26	土師器	内彎形羽釜 (伊勢型)	口縁部～体部上半	検出	-	-	(2.4)	10	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ	7.5YR8/3浅黄橙			
27	土師器	内彎形羽釜 (伊勢型)	口縁部～体部上半	SD120	-	-	(4.0)	5	内面：ナデ 外面：ナデ	7.5YR4/2灰褐	外面：下半部スス不着		
28	土師器	内彎形羽釜 (伊勢型)	口縁部～体部上半	SD022	-	-	(9.0)	30	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ヨコ方向ハケメ	7.5YR8/3浅黄橙			
29	土師器	羽釜	口縁部～体部上半	SD120	-	-	(8.7)	20	内面：摩滅のため不明 外面：ユビオサエ	7.5YR6/4にぶい橙			
30	土師器	羽釜	口縁部～体部上半	SK063	-	-	(5.5)	10	内面：板ナデ 外面：ナデ	7.5YR6/6橙			
31	土師器	羽釜	口縁部～体部上半	SD120	下層	-	(5.7)	10	内面：板ナデ、摩滅のため不明 外面：ユビオサエ	10YR7/3にぶい浅黄橙			
32	土師器	羽釜	口縁部～体部上半	SK079	-	-	(13.0)	30	内面：摩滅のため不明 外面：ナデ、ユビオサエ	7.5YR7/4にぶい橙	外面：煤が多く付着		
33	土師器	内彎形羽釜	口縁部～体部上半	SK092	-	-	(5.8)	10	内面：摩滅のため不明 外面：ナデ、ユビオサエ	10YR6/3にぶい黄橙			
34	土師器	内彎形羽釜	口縁部～体部上半	SK092	-	-	(4.4)	10	内面：横方向ハケメ 外面：ナデ、ユビオサエ	7.5YR7/4にぶい橙			
35	土師器	内彎形羽釜	口縁部～体部上半	SK092	-	-	(6.0)	10	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	内面：10YR6/2灰黄褐 外面：10YR6/3にぶい黄褐	外面：炭化物付着		
36	土師器	内彎形羽釜	口縁部～体部上半	SD121	-	-	(5.2)	20	内面：摩滅のため不明 外面：ナデ、ユビオサエ	10YR7/4にぶい黄橙	外面：炭化物付着		
37	土師器	伊勢型鍋	口縁部～体部上半	SD079	-	-	(2.5)	5	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ナデ、ユビオサエ	内面：7.5YR6/3にぶい橙 外面：5YR7/3にぶい橙～7.5YR4/2灰褐	口縁部：被熱のため赤変		
38	土師器	「く」字形鍋	口縁部～体部上半	SD079	-	-	(3.5)	5	内面：ナデ、ユビオサエ 外面：ナデ、ユビオサエ	10YR7/3にぶい浅黄橙			
39	土師器	半球形内耳鍋	口縁部～体部下半	SD017	上層	(28.0)	(13.6)	20	内面：板ナデ、ナデ 外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	内面：10YR8/3浅黄橙 外面：10YR6/2灰黄褐	外面：炭化物多量に付着		
40	土師器	半球形内耳鍋	口縁部～体部下半	SD120	底面	(27.3)	(14.0)	40	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：10YR3/2黒褐	外面：炭化物多量に付着		
41	土師器	半球形内耳鍋	口縁部～体部上半	SD120	-	(24.8)	(7.3)	10	内面：板ナデ、摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	10YR4/3にぶい黄	外面：炭化物多量に付着		
42	土師器	半球形内耳鍋	口縁部～体部上半	SD120	アゼ	-	(7.0)	10	内面：摩滅のため不明 外面：摩滅のため不明	7.5YR5/3にぶい褐			
43	土師器	半球形内耳鍋	口縁部～体部上半	SD120	下層	-	(5.4)	5	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	7.5YR4/3にぶい橙			
44	山茶碗	碗	体部下半～底部	SK092	-	-	(2.8)	30	内面：ロクロナデ、重ね焼き痕 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目、貼付高台	5Y7/2灰白			
45	山茶碗	碗	口縁部～底部	SD120	-	(16.8)	4.6	40	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台、粉殻痕	5YR8/1灰白			
46	山茶碗	碗	体部下半～底部	SK092	-	-	(3.4)	50	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台、粉殻痕	5Y7/2灰白			

表 8 出土遺物一覧表③

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)			残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径	器高				
47	山茶碗	碗	体部下半～底部	SK092	-	-	6.6	(2.6)	40	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目、貼付高台	5Y7/2灰白	
48	山茶碗	碗	口縁部～底部	SP0825	-	12.3	5.4	4.8	100	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台、粗段痕	5Y8/2灰白	
49	山茶碗	碗	口縁部～底部	SK037	-	(13.4)	5.6	4.4	40	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y7/1灰白	
50	山茶碗	碗	口縁部～底部	SD024	-	12.2	5.1	4.3	80	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	2.5YR7/3淡黄	内面：漆膜あり
51	山茶碗	碗	口縁部～底部	SP0008	-	(13.0)	(5.9)	3.9	30	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	7.5YR7/1明褐灰	
52	山茶碗	碗	口縁部～底部	SP0687	-	(12.1)	4.7	4.6	50	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y8/3淡黄	
53	山茶碗	碗	口縁部～底部	SK028	-	(12.6)	5.0	4.2	60	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目	5Y7/1灰白	
54	山茶碗	碗	口縁部～底部	SK037	-	12.6	4.8	4.1	60	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目	5Y7/1灰白	
55	山茶碗	碗	口縁部～底部	SE001	-	13.5	5.9	3.9	100	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目	10YR6/1褐灰	口縁部：スス付着
56	東濃型山茶碗	碗	体部下半～底部	SP0957	-	-	(3.6)	(1.7)	40	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台、粗段痕	7.5Y7/1灰白	
57	東濃型山茶碗	碗	口縁部～底部	SE001	-	(13.0)	(4.6)	4.2	50	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台、粗段痕	7.5YR8/1灰白	
58	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SK114	-	(8.7)	(4.3)	2.3	30	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y7/1灰白	口縁部：スス付着 (灯明皿として使用)
59	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD017	-	(7.8)	(3.4)	2.4	40	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	10YR7/1灰白	
60	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD120	-	(8.8)	4.5	2.1	50	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	7.5YR7/1灰白	
61	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD120	-	(8.2)	5.5	2.0	50	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目	5Y8/1灰白	
62	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SP0674	-	8.0	5.2	1.8	100	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目	2.5YR7/1灰白	
63	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SP0673	-	7.9	4.7	1.7	100	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	7.5YR8/1灰白	
64	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD079	-	7.8	5.1	2.0	90	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	7.5YR8/1灰白	
65	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD126	-	7.7	4.9	1.5	100	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y7/1灰白	
66	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD126	-	8.0	5.0	1.5	80	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	N8/ 灰白	
67	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SD079	-	(7.5)	(5.0)	1.3	40	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、エビオサエ、板目	5Y7/1灰白	
68	山茶碗	小皿	口縁部～底部	SK092	-	7.6	4.9	2.3	90	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、板目	7.5YR8/1灰白	
69	山茶碗	小皿	口縁部～底部	包含層	-	(8.2)	(4.6)	2.2	40	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、板目	N7/1灰白	

表8 出土遺物一覧表④

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)			残存率(%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径	器高				
70	山茶碗	小皿	口縁部～底部	—	7.6	5.1	1.7	80	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y7/1灰白		
71	山茶碗	小皿	口縁部～底部	—	7.5	5.2	1.7	50	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y8/1灰白		
72	山茶碗	小皿	口縁部～底部	—	(8.0)	(5.0)	1.7	40	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	N8/ 灰白		
73	山茶碗	小皿	口縁部～底部	—	7.6	4.7	1.9	100	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	5Y8/2灰白		
74	山茶碗	小皿	口縁部～底部	—	8.0	5.2	1.6	100	内面：ロクロナデ、ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	N8/ 灰白		
75	東濃型山茶碗	小皿	口縁部～底部	底面	8.1	5.1	1.0	90	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	N8/ 灰	底部外面：花押の墨書有	
76	山茶碗	片口鉢Ⅰ類	口縁部～体部上半	—	(28.6)	—	(7.5)	20	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、ヘラケズリ	10YR8/1灰白		
77	山茶碗	片口鉢Ⅰ類	体部下半～底部	—	—	(14.0)	(4.3)	30	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	5Y7/1灰白		
78	山茶碗	片口鉢Ⅰ類	体部下半～底部	—	—	(10.4)	(5.7)	40	内面：不定方向ナデ 外面：ロクロナデ、ナデ、貼付高台、粗段痕、ヘラケズリ	2. 5YR7/2灰黄		
79	猿投窯産無軸陶器	小壺	口縁部～体部上半	—	(10.8)	—	(12.2)	30	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	5Y5/1灰		
80	猿投窯産無軸陶器	小壺	体部上半～底部	—	—	3.5	(5.6)	90	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、糸切痕	2. 5YR8/1灰白		
81	猿投窯産無軸陶器	突帯文四耳壺	体部上半	—	—	—	(4.0)	20	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、刻面文	2. 5Y7/1灰白		
82	山茶碗	小碗	底部～体部下半	—	—	5.5	(5.5)	40	内面：ナデ 外面：ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	5Y7/1灰白	融着：5枚融着	
83	山茶碗	碗	底部～体部下半	—	—	6.9	(5.7)	40	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台	5Y7/1灰白	融着：4枚融着	
84	山茶碗	碗	底部～体部下半	—	—	(7.1)	(8.8)	40	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、貼付高台	5Y7/1灰白	融着：6枚融着	
85	古瀬戸	天目茶碗	口縁部～体部上半	—	(13.4)	—	(6.3)	40	内面：ロクロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ、鉄軸施軸	素地：2. 5Y8/1灰白 釉：5Y3/1オリーブ黒～5Y2/1黒		
86	古瀬戸	天目茶碗	口縁部～体部上半	—	(13.0)	—	(6.1)	50	内面：ロクロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ、鉄軸施軸	素地：2. 5Y8/2灰白 釉：10YR7/1黒		
87	古瀬戸	天目茶碗	口縁部～体部上半	—	(13.2)	—	(6.1)	50	内面：鉄軸施軸 外面：ロクロケズリ、削り出し高台、鉄軸施軸	素地：2. 5Y8/2灰白 釉：10YR4/3にぶい黄橙～10YR1.7/1黒		
88	古瀬戸	天目茶碗	口縁部～底部	底面	(11.9)	3.5	5.7	60	内面：鉄軸施軸 外面：回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄軸施軸	素地：7. 5YR8/1灰白 釉：10YR 6/4にぶい黄橙～10YR2/1黒		
89	古瀬戸	天目茶碗	口縁部～底部	—	(11.5)	3.9	6.3	40	内面：鉄軸施軸 外面：削り出し高台、鉄軸施軸、腰部錆軸施軸	素地：2. 5Y7/2灰白 釉：7. 5YR3/3黒褐		
90	古瀬戸	天目茶碗	口縁部～体部上半	—	(12.8)	—	(5.1)	20	内面：鉄軸施軸 外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ、鉄軸施軸	素地：2. 5Y8/2灰白 釉：7. 5YR6/2灰褐		
91	古瀬戸	平碗	口縁部～体部上半	—	(14.4)	—	(4.7)	20	内面：鉄軸施軸 外面：ロクロナデ	素地：2. 5Y8/1灰白 釉：7. 5Y7/3淡黄		
92	古瀬戸	平碗	口縁部～体部上半	—	(18.0)	—	(4.9)	30	内面：鉄軸施軸 外面：ロクロケズリ、鉄軸施軸	素地：2. 5YR7/4淡黄 釉：5YR7/3にぶい橙		

表8 出土遺物一覧表⑤

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)			残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径	器高				
93	古瀬戸	平碗	体部下半～底部	SK092	—	—	4.8	(3.6)	40	内面：灰軸施軸 外面：回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰軸施軸	軸：5Y7/3淡黄 素地：7.5YR8/4浅黄橙(素地)	見込み部にトチン跡(5カ所)
94	古瀬戸	平碗	体部下半～底部	SD017	—	—	5.1	(2.7)	20	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：回転ヘラケズリ、回転糸切痕、削り出し高台、灰軸施軸	素地：2.5YR8/2灰白 軸：5Y6/4オリーブ黄	
95	古瀬戸	仏供	体部下半～底部	SK037	—	—	(5.0)	(3.3)	30	内面：ロクロロナデ、ナデ 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、鉄軸施軸	2.5Y8/1灰白	
96	古瀬戸	仏供	体部下半～底部	SK092	—	—	4.5	(2.0)	40	内面：ロクロロナデ 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕	10YR8/2灰白	
97	古瀬戸	縁軸小皿	口縁部～底部	SD011	—	(10.4)	5.0	2.5	60	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：2.5Y 8/3淡黄 軸：2.5YR7/6明黄褐	
98	古瀬戸	縁軸小皿	口縁部～底部	SK052	—	9.4	4.0	2.5	100	内面：ロクロロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、鉄軸施軸	素地：5YR6/2灰褐 軸：2.5YR4/2灰赤	
99	古瀬戸	縁軸小皿	口縁部～底部	包含層	—	(9.8)	(4.8)	2.2	40	内面：ロクロロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、鉄軸施軸	素地：10YR8/1灰白 軸：2.5YR5/4にぶい、褐	口縁部：スス付着、灯明皿として使用
100	古瀬戸	縁軸小皿	口縁部～底部	SK114	—	10.4	5.5	2.7	70	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：2.5YR8/3淡黄 軸：5R4/4オリーブ黄	
101	古瀬戸	縁軸小皿	口縁部～底部	SE003	—	(10.1)	3.9	2.4	60	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：2.5Y7/2灰白 軸：7.5Y6/3オリーブ黄	底部外面：「上」字の墨書
102	古瀬戸	丸皿	口縁部～底部	SD120	—	(10.4)	(5.6)	2.5	40	内面：ロクロロナデ、鉄軸施軸 外面：灰軸施軸	素地：5Y7/1灰白 軸：7.5YR4/3褐～7.5YR3/1黒	
103	大窯	丸皿	口縁部～底部	SK083	—	(10.0)	5.4	2.4	60	内面：灰軸施軸 外面：灰軸施軸、輪トチ痕	素地：5YR8/3淡黄 軸：7.5Y6/3オリーブ黄	
104	大窯	丸皿	口縁部～底部	SK063	—	(11.0)	(5.7)	2.8	40	内面：ロクロロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロロナデ、貼付高台、鉄軸施軸	素地：7.5YR7/3にぶい橙 軸：7.5YR4/3褐～7.5YR3/1黒褐	
105	古瀬戸	折縁中皿	口縁部～底部	SK037	—	(14.4)	6.4	3.3	70	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロロナデ、鉄軸施軸	素地：2.5Y8/1灰白 軸：7.5Y6/3オリーブ黄	底部外面：「花押」の墨書
106	大窯	稜皿	口縁部～底部	SK063	—	(9.6)	(5.6)	2.3	40	内面：ロクロロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロロナデ、貼付高台、鉄軸施軸	素地：5YR8/3淡橙 軸：5YR5/3にぶい赤褐	
107	古瀬戸	御皿	体部下半～底部	SP0957	—	—	(7.0)	(1.7)	50	内面：御目 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕	2.5Y8/3淡黄	
108	古瀬戸	小鉢	口縁部～底部	SK115	—	(9.2)	(4.4)	3.2	40	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：5Y7/1灰白 軸：7.5Y6/2灰オリーブ	
109	古瀬戸	柄付片口	体部下半～底部	SK052	—	—	(8.6)	(4.2)	30	内面：ロクロロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：N8/ 灰白 軸：7.5Y7/2灰～5B7/1明青灰	
110	古瀬戸	合子蓋	蓋	SK034	—	径5.3	2.0	(1.6)	95	内面：ロクロロナデ 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、鉄軸施軸	素地：2.5YR8/1灰白 軸：10YR5/4にぶい黄褐～10YR2/2黒褐	
111	古瀬戸	合子蓋	蓋	SK037	—	径4.5	2.0	1.3	90	内面：ロクロロナデ 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：2.5YR8/2灰白 軸：10Y7/2灰白	
112	古瀬戸	水注	注口部	SK092	—	—	—	(4.4)	5	内面：ロクロロナデ 外面：ロクロロナデ、灰軸施軸	素地：N8/ 灰 軸：7.5Y6/3オリーブ黄	
113	古瀬戸	瓶子	体部上半	SK052	—	—	—	(4.3)	10	内面：ロクロロナデ、ユビオサエ 外面：ロクロロナデ、沈線(4本)、灰軸施軸	素地：N7/ 灰白 軸：5Y7/3淡黄	
114	古瀬戸	根来形瓶子	脚部	SD025	—	—	(12.6)	(3.3)	10	内面：ロクロロナデ 外面：ロクロロナデ、鉄軸施軸	素地：2.5Y8/3淡黄 軸：7.5YR4/4褐	
115	古瀬戸	花瓶	体部上半～底部	SP0949	—	—	(3.5)	(8.0)	95	内面：ロクロロナデ 外面：ロクロロナデ、回転糸切痕、灰軸施軸	素地：N8/1灰白 軸：7.5Y8/2灰白	

表8 出土遺物一覧表⑥

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)		残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径				
116	古瀬戸	燭台	体部中央	—	—	—	(11.5)	50	内面：鉄軸施軸 外面：鉄軸施軸	素地：2.5YR8/3淡黄～10YR8/淡黄 釉：7.5YR4/4褐	
117	古瀬戸	燭台	体部上半～底部	—	—	11.2	(21.4)	90	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、灰軸施軸	素地：2.5Y6/3オリーブ黄 釉：2.5Y7/2灰白	
118	古瀬戸	鉤目付大皿	口縁部～体部上半	—	(29.5)	—	(5.8)	30	内面：ロクロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ、灰軸施軸	素地：2.5Y8/3淡黄 釉：7.5Y7/2灰白	
119	古瀬戸	鉤目付大皿	口縁部～体部上半	—	(33.6)	—	(6.7)	30	内面：ロクロナデ、灰軸施軸 外面：ロクロナデ、回転ヘラケズリ、灰軸施軸	素地：2.5Y78/2灰白 釉：5Y8/1灰白	
120	古瀬戸	播鉢	口縁部～体部上半	—	(27.9)	—	(8.2)	25	内面：ロクロナデ、摺目(6～7条1単位) 外面：ロクロナデ	5YR6/4にぶい橙	
121	古瀬戸	播鉢	体部上半～底部	—	—	9.4	(8.0)	40	内面：ロクロナデ、摺目(6条1単位) 外面：ロクロナデ、回転糸切痕	10YR6/3にぶい黄橙	
122	古瀬戸～大瀬	桶	体部上半	底面	—	—	(11.8)	20	内面：ロクロナデ、鉄軸施軸 外面：ロクロナデ、鉄軸施軸	10YR4/3にぶい黄褐	
123	古瀬戸～大瀬	桶	体部下半～底部	—	—	(16.6)	(8.7)	20	内面：ロクロナデ、鉄軸施軸 外面：回転ヘラケズリ、鉄軸・鏝軸施軸、貼付高台	7.5YR4/3褐～7.5YR2/1黒	
124	瀬戸・美濃	片口	口縁部～底部	—	(13.9)	(9.4)	8.3	30	内面：鉄軸施軸 外面：鉄軸施軸、腰部以下は鏝軸施軸、貼付高台	素地：10YR8/2灰白 釉：7.5YR4/4褐～7.5YR2/1黒	
125	瀬戸・美濃	播鉢	口縁部～体部上半	—	—	—	(8.7)	10	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	5YR4/37にぶい赤褐	
126	中国磁器	青磁蓮弁文碗	口縁部～体部上半	—	(12.0)	—	(4.9)	40	内面：施軸 外面：施軸	素地：N8/ 灰白 釉：10GY7/1緑灰	
127	中国磁器	青磁蓮弁文碗	口縁部～体部上半	—	(16.8)	—	(4.5)	15	内面：施軸 外面：施軸	素地：N8/ 灰白 釉：2.5GY7/1明オリーブ灰	
128	瓦質土器	奈良火鉢	口縁部～体部上半	—	—	—	(4.9)	5	内面：ミガキ 外面：ミガキ、菊花文スタンプ	7.5YR6/6橙	
129	瓦質土器	風炉	口縁部	—	—	—	(4.9)	25	内面：ヨコナデ 外面：連子文	7.5YR6/6橙	
130	瓦質土器	鉢	口縁部～体部上半	—	(29.0)	—	(6.0)	30	内面：磨滅のため不明 外面：磨滅のため不明	2.5YR4/2暗灰黄 外面：炭化物付着	
131	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(5.5)	10	内面：回転ナデ、ナデ 外面：回転ナデ	10YR6/1褐灰	
132	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	(23.0)	—	(6.0)	10	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	7.5YR5/3にぶい褐	
133	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(8.5)	5	内面：回転ナデ、ユビオサエ 外面：回転ナデ	7.5YR7/6橙	
134	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(10.4)	10	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	2.5YR7/4残黄	
135	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(8.4)	10	内面：回転ナデ、ユビオサエ 外面：回転ナデ	10YR6/1褐灰	
136	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	(26.0)	—	(7.6)	10	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	10R3/4暗赤	
137	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(8.0)	10	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	5Y4/4にぶい赤褐	
138	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(7.2)	10	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ	5YR3/4暗赤褐	

表8 出土遺物一覧表⑦

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)		残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径				
139	常滑焼	甕	口縁部～体部上半	—	—	—	(5.9)	10	内面：ナデ 外面：ナデ	10YR8/3浅黄橙	
140	常滑焼	甕	体部下半～底部	SK037	—	(16.5)	(14.7)	40	内面：ハケメ、ヨコヘラケズリ、使用痕有 外面：ヘラケズリ、板ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	程鉢に転用
141	常滑焼	甕	体部下半～底部	SK092	—	(10.0)	(4.3)	10	内面：回転ナデ、ナデ 外面：タテヘラケズリ、	5Y7/1灰白	
142	常滑焼	玉縁壺	体部下半～底部	包含層	—	(13.0)	(4.4)	20	内面：回転ナデ、ナデ 外面：回転ナデ	5YR3/6暗赤褐	
143	常滑焼	片口鉢Ⅱ類	体部下半～底部	SE001	—	(12.4)	(6.8)	20	内面：回転ナデ、ハケメ 外面：回転ナデ、ユビオサエ	7.5YR4/1褐灰	内面：使用痕有
144	常滑焼	片口鉢Ⅱ類	口縁部～底部	SD126	—	(14.8)	12.0	30	内面：回転ナデ、ハケメ 外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ	5YR5/6明赤褐	
145	常滑焼	片口鉢Ⅱ類	体部下半～底部	SD017	—	(12.0)	(5.7)	30	内面：摺目(9条1単位) 外面：回転ナデ、ユビオサエ、ヘラケズリ	5YR6/4にぶい橙	内面：御目付
146	常滑焼	箱形火鉢	口縁部	包含層	—	—	(5.5)	20	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ	7.5YR8/4浅黄橙	
147	常滑焼	羽釜	体部上半	SD079	—	—	(6.5)	10	内面：回転ナデ、ユビオサエ 外面：回転ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	
148	製塩土器	—	脚部	SD060	—	径2.2	(5.2)	20	外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	7.5YR8/3浅黄橙～2.5YR6/3にぶい橙	被熱により赤変
149	製塩土器	—	脚部	SK066	—	—	(4.8)	30	外面：摩滅のため不明	2.5YR6/3にぶい橙	被熱のため赤変
150	製塩土器	—	脚部	包含層	—	径2.3	(7.0)	30	外面：握り放ち、ユビオサエ	7.5YR7/4にぶい橙～10YR7/4にぶい黄橙	被熱のため赤変
151	製塩土器	—	脚部	SD079	—	径2.1	(6.2)	20	外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	10YR8/3浅黄橙～5YR8/2灰白	被熱により赤変
152	製塩土器	—	脚部	包含層	—	径3.0	(5.0)	20	外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	7.5YR8/2灰白	被熱により赤変
153	製塩土器	—	脚部	SD079	—	径2.0	(6.4)	20	外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	7.5YR8/2灰白～2.5YR6/4にぶい橙	被熱により赤変
154	土製品	棒状土製品	—	SK092	—	径6.2	(13.0)	60	外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	5YR6/8橙	被熱により赤変
155	土製品	棒状土製品	—	SE001	—	径5.3	(11.4)	50	外面：摩滅のため不明	7.5YR6/6橙	被熱により赤変
156	土製品	棒状土製品	—	SP0634	—	—	(9.4)	30	外面：ユビオサエ、摩滅のため不明	7.5YR6/6橙	被熱により赤変
157	土製品	管状土罐	—	SD126	—	最大径4.4	—	100	外面：摩滅のため不明	7.5YR6/1褐灰	被熱により赤変
158	土製品	加工円盤	—	SD079	—	最大径4.7	—	10	側面打ち欠き	2.5Y8/1灰白	山茶碗/小碗の底部を打ち欠き
159	土製品	加工円盤	—	SD079	—	最大径6.1	—	15	側面打ち欠き、回転糸切痕	NS/ 灰	山茶碗/小皿の底部を素材にしている
160	土製品	加工円盤	—	SK035	—	最大径5.9	—	100	側面打ち欠き、回転糸切痕	NS/ 灰	山茶碗/小皿の底部を素材にしている
161	土製品	加工円盤	—	SK058	—	最大径6.0	—	10	側面打ち欠き、回転糸切痕	10YR7/1灰白	山茶碗/小皿の底部を打ち欠き
162	土製品	エンゴロ	—	SP0184	—	最大径5.0	厚さ0.8	95	全体に研磨	10YR8/1灰白	竈道具
163	土製品	陶丸	—	包含層	—	最大径2.0	—	100	外面：ユビオサエ	7.5YR8/1灰白	一部に自然袖付着
164	土製品	陶丸	—	包含層	—	最大径2.2	—	100	外面：ユビオサエ	7.5YR6/1褐灰	
165	土製品	陶丸	—	SP0116	—	最大径2.2	—	100	外面：ユビオサエ	10YR5/1褐灰	
166	土製品	陶丸	—	SK114	—	最大径2.2	—	100	外面：ユビオサエ	10YR8/1灰白	
167	土製品	陶丸	—	SK008	—	最大径2.2	—	100	外面：ユビオサエ	5Y7/3浅黄(釉)	一部に自然袖付着
168	土製品	陶丸	—	SP0055	—	最大径2.1	—	100	外面：ユビオサエ	5Y7/1灰白	
169	土製品	陶丸	—	SP0694	—	最大径2.0	—	100	外面：ユビオサエ	7.5YR8/1灰白	
170	土製品	陶丸	—	SD011	—	最大径2.0	—	100	外面：ユビオサエ	5Y8/1灰白	
171	瓦	丸瓦(六軒丸瓦)	丸瓦部	SK064	—	残存径(7.3)	厚さ2.5	10	凸面：縦位の縹目タタキ、ナデ消し 凹面：布目瓦痕	凸面：10YR6/2にぶい黄褐 凹面：2.5Y5/2暗灰褐	

表8 出土遺物一覧表⑧

No	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)			残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径	器高				
172	石器	石錐(未製品)	-	-	長さ1.5	幅0.9	厚さ0.5	-	-	7.5Y3/1オリーブ黒	チャート製	
173	石製品	硯	-	-	残存長(6.9)	幅7.7	厚さ1.0	-	-	5Y4/1灰白	両面硯、粘板岩製	
174	石製品	砥石	-	-	残存長(5.4)	幅4.3	厚さ2.9	-	-	5YR7/3にぶい橙	砥面：4面、砂質凝灰岩製	
175	石製品	砥石	-	-	残存長(9.2)	幅6.7	厚さ3.3	-	-	5YR7/3にぶい橙	砥面：4面、砂質凝灰岩製	
176	石製品	砥石	-	-	残存長(5.6)	幅3.8	厚さ1.4	-	-	5Y8/3淡黄	砥面：2面、緑色凝灰岩製	
177	石製品	砥石	-	-	残存長(3.7)	残存幅(3.7)	厚さ1.0	-	-	7.5YR8/2灰白	砥面：4面、泥質凝灰岩製	
178	石製品	砥石	-	-	長さ19.1	幅15.3	厚さ5.0	-	-	7.5Y5/1灰	砥面：3面、片麻岩製	
179	金属製品	方頭釘	-	-	残存長(5.1)	径0.7	-	90	-	-	-	
180	金属製品	方頭釘	-	-	長さ6.0	径1.0	-	-	-	-	-	
181	金属製品	方頭釘	-	-	残存長(4.5)	径1.0	-	80	-	-	-	
182	金属製品	銅銭	-	-	-	直径2.4	厚さ0.15	100	重量：3g	-	渡来銭(銭文不明)	
183	金属製品	鞘尻金具	-	-	最大長4.2	幅3.1	厚さ1.3	60	外面：金箔あるいは金象嵌残存 内部：木質残存	-	-	
184	金属製品	鉄滓(縮形滓)	-	-	最大長7.7	最大幅4.5	厚さ3.0	80	重量：160g	-	白色石材付着	
185	金属製品	鉄滓(縮形滓)	-	-	最大長6.6	最大幅5.5	厚さ3.4	100	重量：138g	-	-	
186	金属製品	鉄滓(縮形滓)	-	-	最大長5.4	最大幅3.8	厚さ4.5	100	重量：70g	-	植物質炭、鉄釘片含む	
187	炉壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
188	炉壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
189	炉壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
190	炉壁	-	-	-	残存長(12.0)	残存幅(11.0)	残存厚(8.3)	-	重量：704g	-	-	
191	炉壁	-	-	-	残存長(10.0)	残存幅(9.0)	残存厚(4.2)	-	重量：274g	-	-	
192	木製品	曲物	底板	掘形下部	残存長(10.7)	残存幅(5.7)	厚さ0.3~0.4	40	-	-	-	
193	木製品	曲物	側板	掘形下部	-	-	-	-	-	-	-	
194	木製品	曲物	側板	掘形下部	残存長(6.7)	残存幅(4.2)	厚さ0.1	-	ケビキ線残る	-	-	
195	木製品	曲物	側板	掘形下部	残存長(15.0)	残存幅(2.5)	厚さ0.2~0.3	-	綴じ合わせ部残存	-	-	
196	木製品	曲物	側板	掘形下部	-	-	-	-	-	-	-	
197	木製品	曲物	側板	掘形下部	残存長(15.5)	残存幅(4.5)	厚さ0.2	-	-	-	-	
198	木製品	曲物	側板	掘形下部	-	-	-	-	-	-	-	
199	木製品	曲物	側板	掘形下部	-	-	-	-	-	-	-	
200	木製品	曲物	側板	掘形下部	-	-	-	-	-	-	-	
201	木製品	板状木製品	-	掘形下部	残存長(14.0)	残存幅(2.2)	厚さ0.4	-	-	-	-	
202	木製品	板状木製品	-	掘形下部	残存長(16.5)	残存幅(2.0)	厚さ0.3	-	-	-	-	
203	木製品	草履状木製品	-	掘形下部	残存長(15.5)	残存幅(6.6)	厚さ0.15~0.2	40	葉あるいはイグサを編んだ繊維付着	-	板金剛	
204	木製品	加工木	-	掘形下部	残存長(9.8)	径4.0	-	-	-	-	-	
205	木製品	加工木	-	掘形下部	-	-	-	-	-	-	-	
206	木製品	加工木	-	掘形下部	残存長(7.0)	径3.5	-	-	-	-	-	
207	木製品	加工木	-	掘形下部	残存長(11.0)	幅1.0	厚さ0.3~0.4	-	-	-	-	
208	木製品	加工木	-	掘形下部	残存長(15.0)	幅1.7	厚さ1.5	-	-	-	-	

表8 出土遺物一覧表⑨

No.	種別	器種	部位	出土地点		法量(cm)			残存率 (%)	技法等の特徴	色調	備考
				遺構	層位等	口径	底径	器高				
209	木製品	板状木製品	-	-	残存長 (10.0)	幅1.9	厚さ0.3	-	-	-	-	
210	木製品	棒状木製品	-	-	残存長 (12.0)	幅0.4~0.6	径0.2~0.3	-	-	-	-	
211	木製品	棒状木製品	-	-	残存長 (9.4)	幅0.2~0.4	厚さ0.1~0.2	-	-	-	-	
212	貝類	ハマグリ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
213	貝類	オキシジミ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
214	貝類	オキシジミ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
215	貝類	マガキ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
216	貝類	ハイガイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
217	貝類	ウミニナ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
218	貝類	アカニシ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
219	貝類	イボキサゴ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
220	中国磁器	青磁蓮弁文碗	口縁部~体部上半	-	-	-	-	15	内面：無文、施釉 外面：錦蓮弁文、施釉	素地：N8/ 灰白 釉：10GY7/1緑灰 (釉)		
221	中国磁器	青磁碗	底部	-	-	-	-	20	内面：陰刻草花文、施釉 外面：無文、施釉	素地：N8/ 灰白 釉：2.5GY7/1明オリープ灰		
222	中国磁器	青磁碗	底部~体部下半	-	-	-	-	20	内面：陰刻草花文、施釉 外面：無文、施釉	素地：N8/ 灰白 釉：2.5GY7/1明オリープ灰		